逆櫓松
矢籔梅

ひらがな盛衰記

第一

頃は元暦元年正月廿日、朝日將軍木曾義仲、惡逆日々に盛なる、都の騷動鎭めよと、鎌倉殿の下知を請け、大手の大將蒲冠者範頼、勢田をさして攻上らる。搦手の大將には、九郎御曹子義經、伊勢路を越えて上洛ある、心ぞ剛に逞しょ。附從ふ輩には、佐々木の四郎高綱、畠山の次郎重忠、和田の小太郎義盛、侍大將は梶原平三景時、其勢二萬五千餘騎、甲の星を戴きて、夜書分かぬ旅なれど、勇む驛路の鈴鹿山、去年のゆかりと消殘る、雪の戸ざしの麓の關、八十瀨に續く加太山、川を越えては山路にかゝり、山を越ゆれば川瀨に浸り、西へ〳〵と靡く籏手に、東風が知らする風の森、朱の玉垣見えたるは、いかなる神かしら幣、敵追討を祈らんと、暫く床几立てさせて、皆々休らひ給ひける。眺むれば山より山の山道を、腰も二重の老の杖、杖の便にとぼ〳〵と、岨を傳ひて歩みくる。大將見給ひ、「あの杣召せ」と有りければ、和田の義盛承り、「ヤア〳〵老人、大將の召さるゝぞ、早々是へ」と招かれて、はつとばかりに老人は、

御前問近く畏る。義經仰出さるゝは、「山人なれば案内は知ッつらん、是より宇治へ出でんには、近道有りや」と問ひ給へば、「ハァ、心やすき事のお尋や、御覽遊ばせ、西に見えたる平岡をばあらた山と申し、夫より先に頭落の瀧といふ所を行かんには、近道にて候ふ」と云ひもあへぬに、「いやコリャ老人、戰場に向はんに、頭落の瀧とは禁忌なり。まだ其外に道は無きか」「さん候ふ、此の御社を弓手へ廻り、笠置にかゝつてお通り有れ、よき道の候ふ」と、申上ぐれば義經重ねて、「此の御社の御神體は如何なる神ぞ、老人知らずや」と宣へば、「ハァ賤しき身なれば委しく存ぜねども、此の御神をいとどの明神と申して、文字には射手と書き候へ共、云ひ易きが習はせとや、いとどの明神と申すなり」と、語れば大將御悅喜有り、「いとどの明神弓手へ廻り、倍にかゝつて攻めよとは、面白し〳〵。それ老人に恩賞せよ」と、仰も重き御褒美あまた賜はりて、「早御暇」と老人は、宿所をさして歸りける。梶原平三進み出で、「いさまし〳〵、武士の運に叶ひ、弓矢神の御前に、暫くも休らふ事、偏に神の御加護なれば、神前にて的矢を射、軍の勝負を試み申さん、見物あれ人々」と、鎧の引合より陣扇取出し、幕串にしつかと結付け、矢比よき場に立てさすれば、有りあふ人々息をつめ、勝負いかにと待つ所に、梶原一世の晴業と、滋籐の弓のまん中取り、廣言してぞ罵つたり。「抑〳〵梶原が家に傳はる譽と

言つぱ、先祖鎌倉の權五郎景政、敵に左の眼を射られ、其矢も拔かず答の矢を射返し、唐日本に名を上ぐる、見給へ殿原、扇に描きし日の丸は、取り直さず朝日將軍木曾義仲、此景時が一矢にて、朝日の直中射通さん」と、鵞の羽の尖矢打番ひ、きり〳〵と引きしぼり、暫し固めて切つて放せば、何とかしけん、覘は外れて大將の御白簇、横に縫うて止まつたり。なむ三寶と弓投捨て、まじめになれば、すはや味方の大事ぞと、眉を顰めぬ者ぞなき。大將義經聲高く、「やをれ梶原、義經が下知をも受けず、鎌倉殿の出頭を鼻にかけ、出かし顏の采配立、試の的を射損じ、味方に氣おくれさせつるは、言語道斷の曲者。夫れ戰場に日の丸の扇を用ゐる事、淺々しくも思ふべからず、日の丸は卽ち日輪、日の神の御影を寫す陣扇、敵間近く寄るならば、颯と開いて眞額にさし翳し、神の威光を頭に戴く、此日に敵對ふ不覺の武士、神の御罰に亡す道理、今度の敵木曾義仲、朝日將軍と名乘る事、全く此理に相同じ。扇の的には太占の傳と云ふ事有り、故實を知つたる武士は、日の丸を除けて地紙を射るか、蟹目際を射るものよ。夫に何ぞや梶原が、朝日の直中射通さんと、神に弓引く冥罰にて、却て味方の簇を敗る、旁以て不吉の相、よし此上は義經が、故實を正し一矢射て、軍の勝負を試さん」と、思ひ矯めたる弓の末筈、神の御告を白羽の矢、取つて突立ち上り、「アレ見よ扇は西に在り、朝日は東に在るものを、

西に入る日を追詰め〳〵、木曾が胸板射通して、八本の肋骨、ばら〳〵にしてくれん」と、弦打ち番ひし拳のかたまり、よつ引きひやうと放つ手答あやまたず、鱟目射切れば骨ばら〳〵、扇碎けて飛びちるにぞ、今に初めぬ義經の、凡人ならぬ弓勢を、恐れぬ者こそなかりけれ。大將の御弓矢、畠山の重忠受取り、恭しく神前に捧げ奉り、敵に打勝つ柏手も、味方の勝利疑なしと、御悅びは限りなし。「ヤァ恥を恥と思はぬ梶原、味方の簇を射通したるも、弓矢の故實か二心か、返答聞かん」ときめ付けられ、面目なげに頭を上げ、「義經公への申譯、只今切腹仕る、何れもさらば。佐々木殿、介錯賴み存ずる」と、鎧の上帶引きほどけば、四郎聲かけ、「ア、麁忽麁忽、かゝる大事を抱へながら、腹切らんとは同士打も同じ事、但し大將への面當か、今度の軍に高名あらば、申譯は自然と立つ、聊爾有るな」と押ししづめ、威儀を正して御前に向ひ、「梶原が切腹某申し預らん、又白簇を射貫いたるは、凶事にあらず却て吉相、君の御軍慮圖を外さず、敵にはたと當るといふ、瑞相めでたし〳〵」と、秀句に寄せて壽けば、義經御感斜ならず、「高綱いしくも申したり。ヤァ梶原、過つて改むるに憚らず、以來をきつと愼むべし」と、物に障らぬ御詞、あつとは言へど義經に、意趣を含みし其根ざし、此時よりと知られける。斯くて時刻も過ぎ行けば、大將采配おつ取つて、「ヤァ時移りなば敵の要害惡しかりなん」と、先に進

んで打立ち給ふ、寛仁大度の御粧、悠々として勇有り義有り、巍々たる巖石踏みしだき、宇治川さしていづみ川、威勢は輝く光明山、平等院の北の邊、富家の渡りへ著き給ふ。源氏の御代の末長く、榮え榮ゆる時なれや、九重の空ものどけき春の色、霞みこめたる檜皮ぶき、美麗を盡し手を盡す、本曾殿の御館には、御長男駒若君、三つの生先うるはしく、わけて母君山吹御前、御寵愛淺からず、付添ふ女中も御機嫌を、取り〴〵賑はふ其中に、お傍離れぬお氣に入り、お筆と云うて才發者、しとやかに手をつかへ、「此春は珍らしう、お國に變つて都で年をお重ね遊ばし、御祝儀申すも漸〳〵ときのふけふ、馬鞍休める隙もなく、又軍の戰ひのと、心よからぬ世の騷、お案じも尤ながら、四天王と呼ばれたる、一騎當千の人々に、巴樣も向はせ給へば、十が九つ味方の勝、お氣遣ひ遊ばすな。したがなんぼ大力でも、殿のお種を身に持つて、切つはツつは危もの、出物腫物處嫌はず、ひよつと其場で氣が付いたら」「サア自も夫が氣遣ひ、殊更左孕と有れば、疑ひもない御男子、何事なう平產あらば、此駒若の弟御、今まで此子をかはゆがつて貰うたかはり、自も心一ぱいいとしほがりたい、早う抱いて見たいはいの」「ホ、そりや知れた事、常さへどちらもお中が好うて、お互に抱合ごくら、お精次第根次第、中に立つた殿樣も、お嬉しからう」と打笑ふ。折から告ぐる先走り、「只今殿樣御歸館」

と、呼はる聲に家中のめん〳〵、地に鼻付けて畏る。叢蘭茂せんと欲すれども、秋風是を破るとかや、朝日將軍木曾義仲、照輝ける物の具も、龍に翼を得る如き、威勢優美の御粧ひ、しづしづと入り給へは、山吹御前出向ひ、「是は〳〵思ひの外早いお歸り、そしてどうやら御顏持も勝れず、早う樣子が聞きましたい」「さればく、豫て御身も存知の通り、鎌倉の討手範頼義經、夜を日についで攻登れば、宇治の手は楯の六郎根井の小彌太を差遣し、勢田の手は今井の四郎兼平に固めさせ、猶又巴も跡より打立つとはいへども、折悪う樋口の次郎は、多田の藏人行家を攻めん爲、河内の國へ立越ゆれば味方は小勢、敵の多勢に比ぶれは十分が一、中々輙く防ぐべきとも覺えねば、某も今出陣し、士卒の駈引軍配せんと思ふに付き、御暇乞の爲院の御所へ參りしに、嚴しく門戸をさし固め、物音だに聞えざれば、是非なくすごく〳〵歸つたり。エ、口惜しや淺ましや、過ぎつる壽永二年、砥並篠原兩度の戰、平家の大敵を切靡けし勳功によつて、朝日將軍に補せられ、高名譽を顯はせしに、今又平家に從つて、朝敵謀叛と呼ばるゝも、皆君の爲天下の爲、心を碎くかひもなく、却て隔て疎んぜられ、剩へ鎌倉へ追討の宣旨を下し賜はり、一門弓箭を合せ、同姓勝負を決する事、偏に君の叡慮淺きに似たれども、普天の下率土の内、王土に非ざる處なければ、是とても是非に及ばず、此上は片時も早く駈け向ひ、

腕限り攻戰ひ、潔く討死せん」と、思ひ切つたる御顏色、見るに悲しき山吹御前、「扨はけふの出陣は、とくより覺悟遊ばして、討死なされん爲なるか。さほど科なき御身の上、時節を待つてなぜ申披は成されぬぞ。心易う討死と、お前ばつかり合點して、この駒若や巴樣の胎内の、お子はいとしう思されぬか、あんまり氣强い胴慾ぞや。どうぞお心飜し、お命惡なきやうの、御了簡は無い事か」と、すがり付いて泣き給へば、「ア、おろかく、夫程の事辨へぬ義仲にはあらねども、御所には中納言兼雅、修理大夫親信を初め、百官百司も大半平家に心を寄すれば、中々申し披く時節はなし。分けて多田の藏人行家は某に意趣有る中、義仲こそ木曾の山家に育ちたる不骨者、色に迷ひ酒に長じ、奢の餘り朝家を亂す謀叛人と、讒者の口に掛けらるれば、とてもかくても遁れぬ運命、義仲が胸の鏡、曇らぬ證據は天道ならで誰か知らん。泥中の蓮も汚れぬ花の榮を見ず、我が惡名は後代に殘し、身は戰場の土と消え、首は大路に曝されて、恥に恥を重ねん事、返すく〳〵も口惜しゝ。さりながら、我こそ命を落すとも、御身は片時も館を立退き、駒若を養育し、時至らば、義仲が罪なき旨を奏聞し、再び家名を雪がれよ。ふびんや何の頑是なく、是今生の別れとも、知らず分らず我顏を、見て餘念なき笑ひ顏、いぢらしさよ」とばかりにて、勇氣に撓まぬ大將も、恩愛父子の憂き別れ、暫し涙にくれ給ふ。山吹御前は今

さらに、止むる方もなきくづをれ、「たつた今まで子の行末、家の榮御身の上、千萬年も添ふやうに、思ひし事も仇し世の、夢か現か悲しや」と、御身を悶え伏沈み、聲も惜まぬ叫泣、見るに身に沁むお筆が思ひ、「お道理さまや」と諸共に、袖を絞るぞ哀なる。かゝる歎の折こそ有れ、間近く聞ゆる轡の音、しやん〳〵りん〳〵さら〳〵さ、さつと吹きくる春風と、名に負ふ名馬に打乘つて、かけ立て蹴立つる馬煙、生付きたる大力に、馬上も勝れし巴御前、色をゆかりの紫縅、鎧輕げの女武者、長刀かい込み鞭うち立て、馳付く門前ひらりと下り、「扨も此たび宇治の戰、楯根井が計らひにて橋板を撤き、岸には垣楯、川には亂株透間なく、大綱小綱を流しかくれば、鴛鴦などの水鳥も、輙く通るべしとも見えざる所に、血氣の大將義經が下知によつて、佐々木の四郎高綱、梶原源太景季、先陣二陣に川を渡せば、秩父足利三浦の一黨、我も我もと打渡つて攻戰ひ、味方敗軍剩へ、楯根井も討死し、士卒もちり〴〵、無念ながら引つ返し、直に追立て勢田の手へ、向はんと存ぜし所、既に宇治の手破れしかば、勝に乘つたる鎌倉勢、或は木幡醍醐深草月見の岡、思ひ〳〵に打越え馳越え、都へ亂れ入ると聞けば、御身の上氣づかはしく、立歸り候ふ」と、云ひもあへぬに人々は、はつと仰天驚れはて、暫し詞も無かりける。木曾殿少しも動じ給はず、「ホ、ウさこそ〳〵、胸にこたへし味方の敗軍、死せざ

れば、死に勝る恥おほし、今こそ木曾が最期の門出、巴來れ」と宣へば、はつとは言へど伏沈む、山吹御前お筆が歎、見れば心も打ち萎れ、「君の先途を見屆ける、死出のお供は一思ひ、跡に殘りて便なき、御身の上はいかばかり、悲しうなうて何とせう、おいとしぼや」とかきくどき、しやくり上げたる歎につれ、木曾殿もやゝ急きくる涙、止めかねさせ給ひしが、心弱くて叶はじと、振切つて馬引寄せ、ゆらりと召せば、巴御前も泣く目を拂ひ、片手にしつかと轡面、取つて引立て勇みを付け、「コレ〳〵申し山吹樣、死を輕んずるは勇士の道、軍の習ひ、今我君戰場へ打立ち給ふといへども、是又決して討死とも、定めがたきは時の運、此巴が付添ふからは、敵何萬騎有りとても、我命の續かんだけ、片端撫切拜打、蛛手輪違十文字、十方八方打立て追立て捲り立て、ぜひ一方打破つて駈通り、何處いかなる奥山にも、隱れ遁れて時節を待ち、御本意遂げさせ申すべし。先づそれまでは若君諸共、知方の方へ御忍び」と諫むる詞にお筆も嬉しく、「夫はちつとも氣遣ひ有るな、わたしが古郷桂の里の爺親ぼ、源氏譜代の侍、鎌田兵衞が弟、同名隼人と申す者、年寄りたれども、心は忘れぬ弓矢の家、御主人といひ親子の中、命に懸けて圍まはん」「オヽ夫こそ究竟偏に賴む。隨分御無事で山吹樣、若君樣まうおさらば」「お前も達者で、殿樣さらば」さらば〳〵と行く名殘、のこる思ひは果しなき、涕と俱に延上

り、見送り見返る恩愛妹背主従の、歎に泥み行きかぬる、駒の足取諸手綱、引別れ行く三重雲の脚、雪吹まじりの朝霞、比良の高根の冴え返り、春めきながら野も山も、雪に紛へて白簇の、八重立つ敵の其中を、心細くも巴御前、「御最期の供は叶はじと、夫なり又主命の、我身に重き唐錦、古郷へ歸る鎧の袖、供をも具せず唯一騎、名殘涕の玉櫛笥、手枕古しねくたれ髪、夕べのまゝに振亂し、烏帽子引立て眉深く、見る目も曇る鏡山、女とも見えつ又男とも、嚴物作の太刀佩いて、思切れども女氣の、跡へ〳〵と心引く、琵琶の海面弓手に見なし、行く先いかにしら月毛、駒に任せて行く道の、手綱よ二世の別れの鞭、打つに力ぞ無かりける。俄に來し方騒がしく、巴「ヤァあの凱歌は敵か味方か、君はいかに、兄はいかに」と覺束な、人の便をまつ蔭に、馬乘りとどめ立つたる所へ、勝誇りたる鎌倉勢二三十、「落武者返せ」と呼ばはつて追取卷く。巴「何落武者とは舌長し、落ちぬか落ちるか是見よ」と、駒の頭を立て直し、渦く我名巴のごとく、右左に乘廻し、蹴立て踏立て駈けさすれば、詞は主の恥知らず、跡をも見ずして逃け散つたり。ためらふ間もなく、「暫し〳〵」と呼はつて、歩武者一人、軍兵に先だち大音上げ、「木曾殿の御内に男勝りの去者有りと音に聞く、巴御前と見しは僻目か。坂東一の勇者と呼ばれし、秩父の重忠見參せん」といふより早く、鎧の草摺しつかと取り、引下さんとえいと引く。巴

につこと打笑ひ、「男勝りと名を立てられ、強身を見するは恥かしけれど、秩父程の人柄で、坂東一の勇者呼ばり聞きにくい、成らば手柄に引きおろして見さんせ」と、鎧の鳩胸踏み反らし、引くにちつとも動かばこそ、鞍強にこたへしは、作り付けたる如くにて、廣言放ちし重忠も、大力の女持て餘し、馬人ぐるめにこりや〳〵、雪間を分けて生ひ出づる、春にあはづの草ぞ迷惑、踏みちらし、引戻しては引きずられ、引いつ引かれつ寄るべなき、堅田の浦の釣小舟、涙に揉まるゝ如くにて、こたへもこたへ引きも引き、草摺三間引つちぎり、尻居にどうと伏したるは、苦々しくも目醒しゝ。跡に續きし佐々木の四郎、「手柄は仕勝ち、御免候へ秩父殿、佐佐木が組んで見せ申さん」とかけ寄れば、「なう〳〵妬たい佐々木殿、強洒落なせられそ」と押隔て、「宇治川の先陣はせられしが、巴女にはいかな〳〵秩父も敵はぬ、今の倒樣を見られしか。ヤア女、秩父に尻餅搗かせたを手柄にして、木曾へなりとも何處へなりとも、勝手次第に早歸れ。アレ見られよ、歸れといふに耳へも入れず、鎧づきして、すはといはど勝負せんと待つ大強者、勝つてからが女なり、秩父が樣に尻餅ついて、物笑ひ仕出すか、先づ此陣は引いたがよい、合點か〳〵」と、目で知らせば、「オヽそれ〳〵、勇者の尻餅と、高名の首帳も、筆末ならば付かぬがよい。いかにも此陣引くが勝、なう秩父殿」「なう高綱殿」とうなづき合ひ、餘所

にもてなし立歸る、引矢の情ぞ類なき。後陣に控へし内田三郎、「ちょぶ殿、佐々木殿、敵に會うて勝負せぬは、後を見するか二心か、内田三郎家吉參り候ふ」と、諸鎧かけ合せ、「天晴御器量武者ぶりや、烏帽子が下の亂髪、象では爲けれど此の鼻が繋がり申す、一軍して内田が手並を見せ申さん。鎧の上帶下紐も打ちとけよ、引く手に靡け」と洒落言し、隙を見て組留めんと乘廻す。巴が乘つたる駿足は、數度の軍に合ふ坂の、關吹き越えて名に高き、春風といふ名馬、内田が乘つたる韋駄天栗毛、足疾鬼とて足早き、鬼に劣らぬ足どりは、兩方劣らぬ馬上の達者、駒の足並飛鳥のかけり、行違ひさま内田三郎、鎧の袖を引違へ、巴にむずと引組んだり。

「シヤ大膽な、義仲といふ主有る女に抱付いて、オ、こそば、目顔を赤めて強い顔なされても、力の有る體でもなし。聞えた〳〵、女ぢやと思うて深洒落か、人にこそ寄れ此の巴には、麻柄で撞く釣鐘、ならぬ事〳〵、未來の爲の折檻」と、前輪にぐつと引附けて、うんともぐつとも云はさばこそ、片手に素頭引攫み、太首ちよいと引抜きしは、子供遊びの紙雛の、首を抜くより易かりけり。「和田義盛是に在り、聞きしに勝る女の働、さりながら、手柄も人による物」と、生ふる手比の並木の松、ぐつと根こじに引抜いて、馬人共に一打と、口にはいへど心には、馬の諸脚薙ぎ倒し、適手捕にせし物と、追ふさま向ふ横腹へ、薙ぎ立つるを事ともせず、巴は馬

を乘飛ばし、熊の子渡し燕の捩り、獅子の洞入なんどといふ、手綱の祕密に聲添へて、四足を土に著けばこそ、宙を駈けらし地を潛らし、蹄に懸けんと透を待ち、暫しあしらふ折こそ有れ、敵の方に聲立てゝ、「朝日將軍義仲を、石田次郎が討取つたり、今井四郎兼平も、一所に最期」と呼はる聲、聞くに驚くたるみを見て、義盛得たりやかしこしと、馬の前脚どうど薙ぐ。薙がれて前脚折るよと見えし、巴も馬上を眞倒、落つるを其まゝ起しも立てず、家の子郎等をり重り、掛くる千筋の縛も、妹背を結ぶ緣の綱、永き夫婦の初とは、後にぞ思ひ知られける。斯くと注進してければ、御大將義經公、秩父佐々木を召具して、泥際を土手にしき皮や、御座に移らせ給ひける。和田義盛罷出で、「女を生捕り、手柄がましく申上ぐるもをこがましく候へども、鎌倉の御前に御沙汰候ひし、木曾殿の妾、巴と申す女召捕つて候ふ。いかゞ計らひ申さん」と、申上ぐれば、「いしくも仕たんなれ。直に問ふべき子細有り、早いさをれ」と御諚にて、引出す繩取共、返つて宙に引立て、おめず臆せず御大將の膝近く、ふり仰いだる顏ばせに、はら〳〵懸る無念の涙、雪に霰ぞ亂れける。折しも梶原平三景時、武者一人召具し、息を切つてかけ付け、「當手の怨敵は悉く討亡し、鬼神と呼ばれし朝日將軍義仲を、石田爲久が討取り、首を御目に懸けくれよと某を賴み、其身は後陣に罷在る。又召連れし此男は、井上次郎

と申す木曾の郎等、主の惡逆を疎み、今井四郎兼平が首取つて、鎌倉殿へ降參の手土産候ふ」と、直垂の袖に包みたる甲首、太刀に貫きたる今井が首、實檢に備ゆれば、「我殿か兄上か」と、巴は繩取引立てゝ、「變り果てたる御姿や、覺悟の上とは云ひながら、思へば〳〵曉の、鷄に互の泣別れ、長い別れに成つたか」と、二つの首に身を寄せて、人目も恥ぢずどうど伏し、聲も惜まず泣きゐたる。梶原怒つて、「めろ〳〵と今に成つて何の吠えざま、尾籠なり」と引立てさせ、「恐れながら首御實檢なされ、井上次郎にも、御褒美の御詞下さるべし」と取持てば、つく〴〵と實檢有り。「エ、淺ましや、同じ淸和の臺を出で、正しき源氏の累葉として、平家に勝つたる朝敵謀叛の族と成つて、末代源氏の弓矢を汚す一門の面汚し、憎や〳〵」と、持つたる扇ふり上げて、丁々々と打ち給へば、巴堪へず、「聞きにくし義經殿、平家に勝る謀叛人とは何が謀叛、其譯聞かん」と詰めかくれば、「オ、言ふまでもなし、法就寺の御所を燒討し、高位高官の人々を苦めし、是が謀叛朝敵で有るまいか」と、以ての外の御氣色、巴涙をはら〳〵と流し、「されば夫こそ木曾殿の深き御思案、謀叛でない物語、並みゐる人々も聞いてたべ。既に木曾殿、礪並倶利迦羅篠原の合戰に打勝ち、都へ攻上り給ふと聞えしかば、平家一門の人々、三種の神器を守り奉り、西國へ落下る、木曾殿都に入りかはつて、御所を守護し給へば、法皇

御感斜ならず、雲の末海の果までも、追詰め平家を討亡し、三種の神器を事故なく、都へ遷し参らせよとの宣旨、畏つてお請申させ給へども、安からぬ一大事、三種の神器を取り返さんと、直攻に攻めるならば、身の置所ないまゝに、唐高麗へも逃渡らば、勿體なや神より傳はる三種の御寶、永く異國の物とならんは、日の本の國の恥、若し又海底に沈め失はゞ世は常闇、とやせんかくやと御思案有り。義仲朝敵謀叛人の名を取らば、平家心赦して一致せんな必定、折を窺ひ三種の神器を奪取り、跡で平家は麼、サア此上の分別なしと、心に工まぬ悪逆の謀、それとは知らで諸國の驅武士ども、我儘を働きしは、木曾殿のしろし召されぬ事ながら、まんまと上々の朝敵の名を取り給ひ、スハ鎌倉の討手向ふと聞えしかば、寄せられては後手に成る、御身に誤なき由を、申分けさせ給へといへば、いやとよ、他人より一門は尚恥有り、宰我子貢が辯舌をもつて云ひほどくとも、三種の神器を取り返し、平家を悉く討亡さねば、我本心は顯はれず、卑怯げに言譯はすまじいぞ、かく成り果つる我武運、寄手を引受け潔く、討死せんと御覺悟なされ、夫故にこそ闇々と今度の負軍、申す詞に疑ひあらば、仰置かれし詞の末、召されし甲に子細ぞあらん、御覽有れ。いかに思し明らめても、心の内の御口惜しさはいかばかり、人こそ多けれ石田づれの、名も無き下郎の刃にかゝり、勿體なや御首に義經が

扇を受け、一方ならぬ冥途の御無念、あはれ此身がまゝならば、義經殿、飛びかゝつて恨言はん物、エヽ口惜しや悲しや」と、立つて見居て見身悶えし、こぼるゝ涙を押へんと、すれども繩の強ければ、頭を膝に摺り當てゝ、前後不覺に泣きゐたる。高綱仰を承り、御首に立寄つて、甲を取れば鉢受の、絹に卷添へし一通有り、取出し捧ぐれば、つくゞゝ御覽じ仰天有り、「是見よ方々、巴が申すにちつとも違はず、三種の神器を取りかへさん爲の計略、思ひ設けぬ朝敵に成つたる悔の條々、神明佛陀を誓にかけ、逐一に書殘されたり。扨は反逆にては無かりしな、鎌倉殿こそ御心付かずとも、討手を蒙る此義經、尾張三河の間に軍兵を留め置き、一應も再應も、使を以て事の品を問明らめ、反逆謀叛に極らば、其後こそ討つべきに、其氣の付かざる我無調法、扇を以て首を汚せし我誤、御詫び申す赦してたべ」と座を立つて、義仲の首取上げ、「義經が名はしやな王丸、貴殿の名は駒王丸、鞍馬と木曾の住所はかはれども、再び源氏の世になさんと、恥を凌ぎ憂き目を見し、心遣ひは一つにて、平家を西海へほつ下せし、源氏再興の軍初の大功は、貴殿こそ立てられし、其功を空しく、謀反人の惡名を取つて果て給ひし、最期の遺恨を飜し、弓矢擁護の神と成り、源氏の武運を添へ給へ」と、押戴き〳〵、悲歎の涙に暮れ給へば、伺公の武士を初として、かけ構ひなき下部まで、感涙催すばかりなり。和田も哀

にかきくれて居たりしが、御前に向ひ、「ハァ、遠源氏の御血筋とて、驚き入つたる木曾殿の御心底、然れば此女に掛るべき御疑も科もなし。殊に木曾殿の御胤を懐胎せしと傳へ聞く、義盛賜はつて婦妻に具せんと申すはいかど、相筵は踏まずとも、御子誕生有るまでは、我等に預け下さるべし」と、云はせも立てず梶原平三、「ヤァ心得ぬ義盛の願、どう書いて有らうがどう云はうが皆嘘々、謀叛人に極つた木曾義仲、其胤を孕んだ女を預り、子を産ませて何にせらるゝ、但しは其子を守立てゝ、又謀叛を興す氣か、夫はともかうも鎌倉殿の御計らひ、先づ差當る拙者が取次の井上次郎、兼平が首取つたる莫大の高名、御褒美の御詞下さるべし」と、遮つて言上すれば、秩父の重忠、「ィヤ梶原殿、義經公は惣軍の御大將、細かなる事はしろし召さず。今井四郎兼平は、目前木曾殿討たれ給ひぬと、呼はる聲を聞きしより、太刀を銜へつゝ逆樣に、落ちて貫かれ死したる事、誰知らぬ者もなし。夫を何ぞや井上次郎が高名とは、死首取つたるが高名か、頼まれての取持か、自分の最屓か。よし夫はとも有れ、重恩の主の討死を餘所に見捨て、命惜しさの降參、僞りを文る表裏の武士、取次の梶原殿まで心底疑はし、返答あらば承らん」と、一口にやり込むれば、井上次郎進み出で、「ヤァ淺々しき重忠の仰、主人の討死を見て降參する樣な井上にては候はず、一兩年以前より梶原殿を頼み、頼朝公へ心を寄せ、義

仲の身の上、嘘一つ仕られたまで、犬に成つて告知せし某、是ばかりでも、捨てゝも一ケ國や二ケ國が物は有る。其上に又兼平が首取つたる今日の手柄、淡しうてのわんざんならば、此首御邊におまするぞ、勳功解狀に預られよ」と、首取つて投出せば、事を破らぬ重忠も、こらへるにこらへかね、「儕等如きを手に懸くるは、大人氣なしと思へども、弓箭を汚す人非人、微塵になさん」と飛びかゝる。義經暫しと制し給ひ、「井上次郎が忠節は此度初ならず、梶原平三が取次を以て、豫て鎌倉殿へ歸伏せしと申す上は、萬事鎌倉にて鎌倉殿の御裁許有るべし、夫まで互の論は無益、心得たるか。義盛は願ひの儘、巴を汝に預くるぞ。さりながら、平產の子男子ならば朝廷の恐、義仲の名を包み、汝が子とし、和田の家を相續すべし、巴が縛とく〳〵」と、搦めらるゝは義經の、情の詞ばかりにて、繩も解かるゝ氣も溶くる、朝日將軍義仲の、名を象りて生子を、朝比奈三郎義秀と、古今に秀でし兵は、此胎内の子なりけり。「いざや人人、都に入りて勝軍の御奏聞せん。エ、是非もなき浮世の習ひ、義仲の首今井が首、土中に埋み跡弔はどやと思へども、院の御氣色計りがたし、檢非違使の手に渡さでは叶ふまじ」と、秩父佐々木に取持たせ、道を早めて走井の、軍の備へ九重の、都に蹄をとばせらる。梶原井上手持なく顏見合せ、「ア、梶原殿、義經と云ひ秩父といひ、大抵では嚙まれぬ相手、鎌倉殿もあれな

れば、いかう充の違ふ事」とぶつつけば、「何さ〳〵、義經が爰での我儘は、烏無い里の蝙蝠、追付け鎌倉殿の御前、見せ付ける所で見せ付ける、何奴らも覺えて居よ」と睨め廻し、次郎を引具し立出づれば、巴すつくと立上り、「待つた〳〵井上次郎、君御存命の内よりも、鎌倉へ内通とはたつた今聞いた。いかいお世話で有つたの、夫はいうて詮ない恨、指當る兄の敵主君の仇、まう臨終に間は無い、旦那寺へ人遣らんせ」と、曲る詞も井上が、頭の上に雷の、落ちかゝるかと悚じく、「ナウ梶原殿、弓矢取る身は相互、今の命をお助け」と、脚腰立たず身もわなわな、頼む人より頼まるゝ、梶原も底氣味悪く、「人遣ひがなくば、旦那寺へは身が行かう」と、云捨てゝ駈け出せば、續いて遁ぐる井上が、綿がみ摑んで引戻され、「扨は道が違うさうな、どちらへ行ても大事ない」と遁出す、先には和田が仁王立、左義盛右巴、一つ巴にくるくると、ぢり〳〵廻する井上次郎、「命お助け〳〵」と、土に平伏し手を合せ、泣くより外の事ぞなき。「エ、腑甲斐なき業さらし、主君の讎、兄の敵には不足ながら」と引きよせて、首ねぢ切らんとせし所へ、井上が郎等ども、主の命を助けんと、一座に拔きつれ切つてかゝる。「オオしをらしや、欲しがる主を得させん」と、鎧の上帶かい摑み、落花微塵に投げちらし、群りかゝるを引き寄せ〳〵、せめては是で色直し、追付け和田と祝言の、印今打つ人礫、身輕き働き

蝶花形、出合うた敵は三々九度、むら〳〵ぱつと逃げちつたり。猶も進むを引止め、「さのみ長追長柄の銚子、返せ戻せは無益ぞ」と、諫る駒に小角を入れ、時にあふみの鮒盛や、乘りしづめたる義盛が、二巢のひれに相生の、松の榮やえいこの〳〵、〳〵〳〵、この壽をよろ昆布、敵に勝栗のつし熨斗、つれて陣所へ歸りける。

第二

鷹は水に入つて藝なく、鵜は山に在つて能なし、筋目有る侍も、世事には疎き町住居、削るよじさへ細もとで、しんく黑もじ身過ぎ楊枝、商賣磨きやうじの看板、猿も食はねど高楊枝、浪人とこそ知られたれ。此家の家主門口から、「暮れるまで精の出るは、急な誂へ物でござるか」「コリヤお家主樣、けふは何事が起つてやら、ちよこ〳〵お出、ム、聞えた、晦日前なりや家賃の催促、私も油斷は致さぬ、此楊枝仕立てゝ先へ遣れば、其價で家賃は野々山、跡の月の殘りも、受取り次第上げませう」「いや催促ばかりに來るでもおぢやらぬ。楊枝ばかり削つては埒の明かぬ身代、取付きから知つてゐる馴染のそなた、はかの行かぬ世話が笑止さに、思ひ付いた事も有り、咄して見たさ、來事は來ても以前が侍、竈相な事は云ひ出されぬ」「是は〳〵

御遠慮迷惑、御懇意の上お咄とは先づ耳寄、早う聞きたう存じます」「ムウ其氣なら咄しませう、浪人殿にはよい娘持たれて、木曾殿へ奉公ぢやと聞いてゐる。此間の騒動、木曾殿も死にめしたりやお娘は浪人、成らぬ身代に口が殖えては彌行くまい。幸とおれが知つた大金持、器量の好いおてかを欲しがる、捨金の廿兩や卅兩は此家主が受合、危氣もなう家賃も取れる、重一打出した仕合と、來て見るも充が有る。夕べ八つ過、此處な表を頻に敲き、其跡は内へ這入り、咄したは女の聲と、相借屋の者が知らしたで、扨はお娘と來て見れば、何時も變らぬ古長持と古親仁、破屏風缺籠、鍋洗うて待つてゐるに戻らぬの」「オ、御存知の上は隱すに及ばぬ、成程奉公致させ置いた木曾殿の沒落に付き、娘が事案じぬでもござらぬ。さりながら軍の法で、女子には指もさゝぬ由、又指す奴が有つても、指されて居る樣な鈍なやつでもござらぬ。親の内は知れて有る此の桂の里、遲いか早いか戻りませう。夕べ門を叩いたは、夜通參りの愛宕の下向、又隣の兩換店と取違へ、こちの戸を割れる程敲く、何ぢやと表明けたれば、錢が欲しいというた故、おれもほしいと云ひ返し、笑うて仕廻うた」といひければ、「ム、夫で聞えた、談合は娘の顏見てから、コレ手に取らぬ咄し充にして、仕事後れて家賃待てといふまいぞ。咄す内に日も暮れた、店の仕廻手傳はう」「夫はお慮外」「慮外ぢやおじやらぬ、一人してぐわ

たひしすりや、店が損ねて家主の迷惑、エ、此猿めが守し居るで、賣れぬ楊枝も此奴も内へ取り取り、上店下店上げて、そこで鍔門の戸しめて、家賃の夜なべ精出そぞや」「合點でござります」「お娘の事も」「サア合點、ようお出でなされました。家賃も娘も來次第に、こちから御左右致しませう、お出でには及ばぬ」と、門送して家主が、内へはひるを能く見屆け、立歸つて締むる門の戸の、干破ふし穴釘穴より、若しも覗く人もやと、筵立てかけ古喉簾、店の道具で取繕ひ、「サア是で覗く氣遣ひない、嘸お氣詰り御窮屈」と、長持の蓋明ければ、いたはしや山吹御前、駒若君を抱き參らせ、お筆諸共出で給へば、引さがつて頭を下げ、「移りかはる世の習とは申しながら、朝日將軍の御臺若君、かゝる埴生に隱れ忍び、日影もさゝぬ櫃の中、若君のおとなしう、出たいともおつしやれず、むづかりも成されず、よう御堪忍遊ばした、お氣晴しにハア、何ぞお慰、オ、夫よ、店守の此の猿、健なにあやかりおはしませ、まさるめでたい御壽命」と、祝ひ申して指出せば、いたいけ顏のにこやかに、猿の頭を叩いつ撫でつ、御機嫌よげに見えければ、山吹御前の御悅び、「何から禮をいはうやら、譜代でも無い主從、お筆に連れて親御まで、いかい世話に成りまする。義仲樣御最期と聞くより、同じ道にと思ひしが、遺言も有り此若を、捨てゝも死なれぬ身のつらさ、思ひやつて」とばかりにて、銚は盡きせぬ御

涙。「ア、勿體ない、私がとつ様に何お禮」「オ、娘よう言うた、元來桑も源氏の譜代、野間の内海にて相果てし、鎌田兵衛政清が弟、鎌田隼人清次と申す者、子細有つて兄政清が不興を受け、義朝卿の御先途も見屆けず、本意を失ふ痩浪人、古主の源氏へ歸參の望、一人有る我娘、姉のお筆を御前へ指上げ、千鳥といふ姉を鎌倉へ遣はし、出頭の梶原家へ奉公さすも、歸參の便と存ぜし所に、思ひも寄らぬ源氏と源氏の御軍、指當る姉が御主人、見捨てゝ出世の望は致さぬ、年こそ寄つたれ、心一ぱいお力に成り申さん。ヤア夫に付き、木曾殿の御内に四天王の隨一と呼ばれし樋口次郎兼光、討死との沙汰もなし、存命でゐるならば、御臺若君引受けて、世話致すべき樋口が安否、お聞き及びなされずや」「さればいの、樋口次郎は多田藏人を攻めんとて、河内の城へ向ひしが、其後はいなせも聞かず、世に連れる人心、頼みに思ひし樋口にさへ、見捨てられたる親子の者、自が身は厭はぬ、何とぞ若を守り育て、二度世にも在らせて下され、頼むは隼人一人ぞ」と、又泣き沈む御風情、お筆親子も諸共に、絞りかねたる袖袂。げにや至つて悲しきには腸を斷つといふ、猿の楊枝や曲者ぞと、梶原が郎等番場忠太、家主に案内させ、聞耳立つる表はひそ〳〵、内には忍ぶ泣いじやくり、扨こそ知れたと打黙き、門の戸荒く打敲く。隼人驚き是は又家主、這入らせては事やかましと、欠伸交りの聲しはぶき、「熟

う寐てゐる所を誰ぢやいの、用が有るなら明朝ござれ」と、寢覺の體にもてなせば、「いやおれぢや家主ぢや」「オヽ其の家主合點ぢや、夜夜半まで家賃の催促、夜が明け次第誂へ楊枝先へ渡し、錢受取つて急度濟す、起きるのが大さうな、明日の事に」と、云ひつゝそつと指足して、戸口の隙間を窺ひ見れば、表に捕手の荒者共、すは打入らん氣相なり。「なむ三寶あの大勢、外に落ちる道もなし、とやせんかくや」と胸も心も碎くるばかり、門の戸猶も打ちたゝく。「オ、夫よ〳〵よき思案」と、娘が耳に口さし寄せ、「若君のお小袖を、コリヤかうしてな、其道はかう〳〵〳〵」と、知らすれば打默き、破屏風引立てゝ、若君御臺もろともに、身拵へする其中に、隼人は戸を明け、「お家主何事でござります」と、ぬつと出づれば、「それ」とかけ聲番場が家來、十手ふり上げおつ取卷く。「ア、これ〳〵〳〵聊爾なされな」「ヤア聊爾とはのぶといやつ、木曾が女房小忰、圍まうたに紛なく、主人梶原の下知を受け、番場忠太が捕りに來た。尋常に渡せばよし、さなくば擲つてぶち据ゆる」家主「コレ浪人殿まう叶はぬ、圍まうた子をあなたへ渡せば御褒美を下さる、意地張らるゝと楊枝の樣な其腕が、背中へ廻つて靑細引、家主の過怠にそなたの飯を運ばにやならぬ。家賃取らぬ其上に、さう成つては家主滅却、サア早う渡されい」と、齒の根も合はぬ震ひ聲。「いや家主の難儀より、指當つて此身が可愛い、若君

を渡しましよ。とてもの事に斯う成されて下されぬか」「イヤかうとは細言、願ひ有らば早卷き出せ」「アノ物でござります、假初にも娘が主人、取つて出しては此頬が世間へ出されぬ。私も立ち何れも立つ了簡は、何か無しに此處には置かれぬ、出て行けと追出します。皆は表に隱れてござつて、此内を出る所、彼若君を引つたくつて、女にはお構ひ有るまい、すりや娘も助かる、何處も彼處もよい樣に、御了簡頼入る」と手をつけば、忠太默き、「夫程の儀は宥免をしてくれう、かくまうた者ども早う出せ。家來どもは挑燈片寄せ物音すな」と、其身も小陰に立ち忍ぶ。集人は悦び内に入り、又呼いて親子が談合、わざと表へ聞かする大聲、「ヤイ娘、親を充に思うてと吟味が强い、背中に腹は換へられぬ、主人の供してとつとと失せう」「エ、とゝ樣そりや聞えぬ、他人でも義理は知る、娘の主人を出て行けとは、胴欲な事ばかり」と、聲には泣けど目に泣かぬ、親子が狂言表には、すは出るかと待受くる、番場忠太が腕まくり、内には集人が心付き、笠取つてやり杖渡し、「なんぼ吠えても叶はぬ〳〵、出ていきをれ」と、言うては旅の用意の油單、渡しては「ヤレ失せい」と、いうては煙管たばこまで、殘る方なく取持たせ、「あれ〳〵しぶとい吠面」と、二人を門へ突き出せば、待ちに待つたる番場忠太、山吹御前を引つ捕へ、「ヤこいつは手振り、次の女郎が抱いてをる、此悴め」と搔い攫む。「こは

情なや渡さじ」と、爭ふお筆が手をもぎ放し、若君を奪ひ取り、「儕も共に」といふ聲に、「なう恐ろしやお助け有れ」と、山吹御前の御手を取り、躓けつ轉びつ落ちて行く。「やれ〳〵嬉しや、家主に難儀も掛らず、お手に入つておめでたい。ちつぽけな形をして結構な物著て居る」と、いふに番場も心付き、「こいつごねたか、しやち張り返つて生干の樣な小忰」と、挑燈取寄せとつくと見、「ヤア駒若ちやないこりや猿松、店晒しで恥さらしたにつくい浪人、踏ん込んでぶち殺せ」と、一度にどし込む門口の、小脇に隼人は隱れゐて、捕人を遣り越し入りかはり、ずつと出て表の戸、外より引立て鍵手早く海老錠おろす。内には手々に疊を上げ簀子の下から長持の、底まで敲けど、「こりやをらぬ、抜道はなし、ム、扨は門へ」と引返す、表の戸口は外から立切、忠太主從家主交り、「コリヤどうぢや〳〵」と、うろ〳〵うろたへ、「爰明けよ」と、内から敲く門の戸の、外に集人が心地よく、「コレ家主、家賃せがむが面倒さに、家を明けて今行くぞ、楊枝屋が猿智慧は、儕等に置みやけ、若君は爰に抱いてゐる」と、内懷よりお顏を出し、「御運强きにこやか顏、見せたけれどもマア成らぬ、ゆるりとそこにけつかれ」と、山吹御前の御跡慕ひ、一散に落ちて行く。「ヤア耄め遁すな」と、番場主從聲々に、門の戸ぶち破り店ふみ碎き、いづくまでもと追つかくる。跡には家主口あんごり、「コリヤさゝぼうさに仕をつた

な、家は碎かれ家賃は取れず。エ、儘よ、百貫の方に猿一疋、こいつめに著物きせ、爰をさるとは秀句ぢやの、さるとてはよう仕をつた、さるてんがうとは思はれぬ。儕楊枝屋め、力こぶ楊枝出さば出せ、家賃を取らで置くべきか」と、跡を慕うて急ぎ行く。げに武士の習ひとて、夫は跡の軍場に、妻は東の留主住居、梶原平三景時が屋敷には、嫡子源太景季が誕生日の祝ひとて、上段の床に兜鎧を飾り立て、敵にかちんの備へ物、御神酒の三方熨斗昆布、取りぐ〜運ぶ其中に、千鳥といふは鎌田隼人清次が乙娘、親の出世の便にと、望有る身の宮仕へ、友朋輩にも憎まれぬ、顔容より心まで、愛敬有つてかはいらし。「サア〜奥様の云付の通り、お備物も殘らず揃うた。此障子をかうしやんと立て切るとまう仕廻、アヽ嬉しや」と云ひければ、「オヽそなたは取分け嬉しい筈、何がな御用聞きたがりやる。若旦那の誕生日、都の軍も勝ぢやけな、どうかかうかとお案じなされた母御様より、百增倍心がいそ〜千鳥殿」「ハテ此お館に奉公する身、嬉しいにかはりはない」「イヤかはりの有る證據云ひましよ、若旦那のお立ちの時、長い別れに成らぬ様に、めでたう凱陣遊ばし、お顔見せて下さんせと、涙片手に抱付きやつたを見てゐるに、隱すが憎い、擽つて白狀さしよ」と立ちかゝれば、「なう誤つた、こらへて下され、心安い朋輩中、隱したには譯が有る。よい事には寸善尺魔と、弟御の平次景高様、此千鳥に惚れたとて、口

説かるゝ其つらさ、わたしは兄御の源太様にと、さう言はれぬも日比の氣質、こんな氣びらい聞すが否やたまらぬ〳〵、かんまへて沙汰なしに」と、咄の中の間の襖、そつと押明け病の床より、立出づる梶原平次景高、一重帶に大脇差、伊達紙子の大廣袖を打ちかけ、「ヤアあた喧しい女郎さいめら、母人の伽はせないで何をほざく、奥へ失う」ときめ付けられ、あいと一度に立つて行く。「コリヤ〳〵千鳥、そちばかりはこゝに居い」「いや私もお袋様の傍へ」「と云うて外さうてな、そりや成らぬ。願うても無い上首尾、サアこい寢間へ」と手を取れば振りはなし、「お前には御病氣故、親御様のお供も成されず、お留守に殘つて御養生の最中、夫にマアお寢間へとは、お傍に居るさへわたしや怖い」「オヽ、病人とは不粹な、藥呑むは假令の見せかけ、鼻も引かぬ達者な平次」「フンすりや煩ひは成されぬか」「オヽ、嘘ぢや」「そりやなぜに」「なぜにとは餘所餘所しい、そちをおれが手に入れうで、邪魔なわろ達京へ登し、甘い留守事せうでな、作兵衛と出かけた心中男、君よ憎うは有るまいがな」「サイナ、夫程までわたしが事、思召して下さりまするを、忝いと言はれぬは、京に居られますとゝ様は、鎌田隼人清次と申して、源氏譜代の家來筋、頼朝様に歸參の望、御出頭の此お家、御奉公致しまするも、折もあらば右の願、申上げたい下心、お袋様の赦しもないに、お前の仰に隨へば、いたづら者とお隙の出るは定の物、

さすれば親の望も叶はず、爰をよう聞分けて」「ヤアだまれ千鳥、赦しが出ねば隨はれぬといふ者が、兄源太とはなぜ寢た」「いやわたしは」「いやとは何處へ、たつた今儕が口から、よい事には寸善尺魔と、ぬかさぬ先から知つてはゐれど、言ひ出しては物が無い、ハテ儕さへ應と言や、兄の分けでも戴く合點。かう底を打割るからは、いやとは言はさぬ、手も足も引つくゝつて、無理行りに抱いて寢る。サア應といふか否というてくゝらるゝか、どうぢや〳〵」と肩口とらへ、手詰に成つて動さねば、「コレ無體な事なさるゝと、平次樣の病は嘘、作病でござりますと、大きな聲で言ひますぞえ」「夫いうてたまる物か」「言ふなならこゝ放して」「放しては戀が叶はぬ」「そんなりや言ひます」「いや云はさぬ」と、口に手を當てせり合ふ所へ、「都より急用有つて横須賀軍内、只今下著」と打通れば、平次悔り、「邪魔な所へ」と、うろ付く隙をそつと拔け、千鳥は奥へ逃げて行く。景高居直り、「ヤア軍内、急用とは氣遣はし、樣子いかに」と尋ぬれば、「さん候ふ、御惣領の源太殿、鎌倉へ御返しなさるゝ其儀に付いて、奥樣へ親旦那より御内意の此文箱、先へ參つてお渡し申せ、畏つたと急ぎの道中、川々の水に隙取つて漸〳〵只今、源太殿にも追付けお著」「何ぢや兄君が戻る、エ、夫では此方の工面が違ふ、何かに付けて面倒いわろ、何の爲に歸さるゝ、そちや知らぬか」「成程知つて居りまする、其樣子はお前の

御果報、今度宇治川の先陣、佐々木四郎に高名せられ、源太殿は後れを取り、京中の物笑ひ、何が手ひどい親旦那、御機嫌さんぐ、京で殺せば恥の上塗、鎌倉で腹切らせ、汝を遣るは檢使同然、必ず手ぬるく致すなと、きつと仰付けられた。惣領殿を仕廻うてやれば、御家督は指詰めお前、めでたうは思さぬか」「めでたいく、結構な吉左右能う知らせた、委しい事は奥で聞かう、先づ其文箱を母人へ」と、打連れてこそ入りにける。時もあらせず表の方「若旦那の御歸國」とさざめく聲々、梶原源太景季、鎌倉一の風流男、戰場より立歸る、烏帽子の掛緒古實を正し、大紋の袖たぶやかに、座敷に通れば、母の延壽、「何源太が歸りしか、いづらやく」と立出で給ひ、「ナウ源太、頼朝卿の御運つよく、木曾殿を亡し給ふ、範頼義經兩大將を初め參らせ、誰々も恙なしと聞きつるが、顔を見て落付きました」「仰のごとく木曾の狼藉早速に切りしづめ、押續いて西國表、平家の大敵攻滅し、法皇の宸襟を休め奉らんと、攻支度の評定取り取り、父にも益御勇健、先は變らぬ母人の御有樣、拜し申して祝著」と、謹しんで述べければ、「いやとよ源太、都は未軍なかば、そなた一人歸されしは心得ず、父御の仰は聞かざるか」「いや何とも承らず、鎌倉へ立歸り、子細は母に尋ねよと、仰も辭みがたければ、ぜひに及ばず罷歸る。母人の御方へは、いかど申し參りしやらん、覺束なし」と窺へば、「オ、軍内が渡せ

し文箱、是見よ封もまだ切らず、心元なや披き見ん」と蓋押明くる其隙に、千鳥は戀しい殿御の顔、守りつめても親子の中、包む戀路の遣る瀬なさ、「申し源太樣、常さへ旅は憂き物に、たんと御苦勞なされしやら、お顔の細つた事はいな、お氣もじ惡うはござりませぬか」「ホヽしをらしい、そちが問ふで氣が付いた、身が發足の時分には、弟平次病氣で有つたが、本復をしめされたか」「アイナ本復やら立腹やら、達者過ぎて迷惑を致します」「夫は一段、どこにお居やる、對面したい」「イヤ兄者人、平次是に罷在る」と、一間の内よりのさばり出で、「先何か差措いて聞きたいは、宇治川の先陣、見事な高名遊ばしたでござらうの」「オヽ此源太が身に取つては、過分なる今度の高名」「何高名とは、コリヤ珍らしい、お咄しなされ承らう」「ホヽ語つて聞さん承れ、さる程に義經の御勢は都合二萬五千餘騎、山城國宇治の郡に押寄する、比は睦月の末つかた、四方の山々雪解けして、水倍增りし彼の大河、宇治橋の中の間引き放し、向ふの岸には亂杭逆茂木透間もなく、甲うたる武者五六千、川を渡さば射落さんと、鏃を揃へて待ちかけたり。かゝる時節に渡さずば、いつか譽を顯はさんと、我君より賜はつたる磨墨と云ふ名馬に、泥障はづしてゆらりと打乘り、名にたちばなの小嶋が崎より、逸散に駈け出せば、續いて跡に武者一騎、春の朝の川風に、誘ふ轡の音はりん〳〵、誰なるらんと見返れば、古歌の

心に似たるぞや、おぼろ〳〵と白玉の、霞の隙より駈來るは、佐々木四郎高綱、馬は劣らぬ池嵯麼羅、二騎相並んでざんぶ〳〵と打入るよ」「コレ兄ぢや人、是までは咄しもならう、是から先が勝負のかんもん、自身には云ひにくかろ。兄弟のよしみ、平次が代つて咄さう」と、いふに千鳥が聞きかねて、「兄御樣の高名咄、横合から腰折らずと、默つて聞いて居さしやんせ」「ヤァいやらしい方持つな、我には構はぬ。今の跡はかうで有ろ、佐々木は聞ゆる剛の者、兄君は知れたぬるま殿、つひに佐々木に乘負けて」「いや〳〵〳〵、何のあなたが負け給はん、知らぬながら千鳥が推量、敵は川を渡さじと、水底に大綱小綱十文字に引き渡し、駒の足を惱せしに、頓智の源太景季樣、太刀をするりと抜き給ひ、大綱小綱切り流し〳〵、なされたでござんせう」「オヽ、千鳥がいふに違ひなく、綱を殘らず切拂ひ、佐々木が乘つたる池嵯に、一段ばかり乘り勝つたり」「アレ聞き給へ負けはなされぬ。アヽ嬉しや、夫聞いて痞が下りた」と悅べば、平次頭を打振つて、「某佐々木に成り代り、一問答仕らん。其時高綱大音上げ、コレ〳〵景季馬の腹帶が延び候、鞍反されて怪我有るなと、聲を掛けたで有らうがの」「ホヽ、委しくも能く知つたり、某はつと心付き、弓の弦を口にくはへ、馬の腹帶に諸手をかけ、引上げ搖上げしつかと締める」「コレ〳〵夫がうつかり、延びぬ腹帶を延びたといふは、こなたの鼻毛を見ぬいた計略、

うぢ〳〵めさるゝ其隙に、さつと佐々木が打渡つて、宇多の天皇九代の後胤、近江源氏の嫡流佐々木四郎高綱、宇治川の先陣なりと呼はりしは、天晴手柄こなたは大恥、微塵違は有るまいが」と、倍にかゝつて恥ぢしむれば、源太は黙していらへなし。傍からハヽ〳〵〳〵と、あせる許に女氣の、何とせんかた泣く千鳥、平次景高せゝら笑ひ、「どいつもこいつも吠面、ハテ氣味のよい事の。コレ母者人、惣領の恥かき殿を、仕舞へというて來ませうがの、其狀おれにも見せさつしやれ」と、差出す腕を掴きのけ、「コリヤ此文は母への名宛、何が書いて有らうと儘、そちには見せぬ、母を差置き出しやばるな」と、呵る聲さへおろ〳〵涙、又繰返す文體に、心を痛めおはします。「エ、、子に甘いも事に依る、生けて置く程親兄弟の面汚し、コレ爰な腰拔殿、せめては親の催促待たず、てこねうと思ふ氣は無いか、夫も成るまい。世間は切腹したにして、其首刎ねて埒明けう」と、ずはと拔いて切りかゝる、刀の鍔際むずと取り、「兄親に對し尾籠の振廻、腰拔の手並腰骨に覺えよ」と、引つかづいてどうど投付け、起しも立てず刀の背打、りうりうはツしとぶちのめせば、あ痛〳〵と顏蹙め、這ふ〳〵逃げてぞ入りにける。「コリヤ〳〵千鳥、源太が母へ申上ぐる仔細有り、次へ參れ」と人を除け、「かく申さば、景季が命惜むに似たれども、ゆめ〳〵助かる所存にあらず。此度宇治の合戰前、父にて候ふ平三殿、軍の勝負を試みん

と、御赦もなき的を射損じ、其矢が計らず大將の、御白旗に當りしは、味方の不吉父の不運、申譯立ちがたく、切腹に極りしを、佐々木四郎が情によつて、君の御前を云直し、父の命を助けたり。其場に某在り合さず、跡にてかくと承り、佐々木に逢うて一禮をと、思ふ間もなくはや合戰、宇治川の先陣は我も人も望む所、有るが中にも川を渡すは佐々木と某、なむ三寶、父の爲には恩有る佐々木、此人に乘勝つては、侍の道立たずと、心一つに了簡定め、先陣を彼に讓り、手柄させしは情の返禮、後を取りし某は、元來覺悟の上なれば、恥も命もちつとも厭はず、先陣の高名にをさ〳〵劣らぬ孝行の、高名と存ずれど、白地申されぬは、武士と〳〵の誠の情、父の爲に捨つる命、お暇申す母上」と、指添に手を掛くれば、「やれ待て源太、それ程知れた身の云譯、父御へはなぜ云はぬ」「いや云譯を仕れば、佐々木が手柄を無にする道理、據なく母人へ、申上げしも本意ならず、死後とても此事は、御沙汰なされて下さるな」「いや〳〵夫は若氣の了簡、今死んでは忠孝に成らぬぞよ」「こは仰とも覺えず、義を知つて相果つれば、忠も立ち孝も立つ」「いや立たぬ、なぜといへ、梶原の家は坂東の八平氏、貞氏を名に表はす平三殿の惣領のそちなれば、名をば平太といふべきを、源太と付けしは、恭くも征夷大將軍源の頼朝卿、石橋山の伏木隱れ、危き御命助かられし、平三殿を命の親と宣ひて、勿體なくも家

來の子を、兄弟分に思召され、源の氏を賜はり、源太と名のらせ、源氏嫡流の御召有る、産衣といふ鎧まで下された烏帽子子、爰をよう合點しや、今命を捨てゝはな、産の親への孝行は立たうが、烏帽子親の我君へは、どの命で御恩を送る、主なり親なり、忠孝が立たぬとは、爰の事を言ふはいの」「ィヤ其御恩を忘れは致さぬ、烏帽子親とは憚あり、主從は三世の契、生きかはり死にかはり、君に仕へる侍の魂」「ャァ情ない、三世の契のお主には、未來でも逢はれうが、親子は一世、此世ばかりで復逢はれぬ。母を置いて死なうといふ子も胴慾、殺せと書いて送られし連合は尚胴慾、悪い子でさへ捨てかぬるは親の因果、まして健氣な子でないか、蟲けらの命でさへ、科ない者は殺されぬに、塵芥か何ぞのやうに、心易そに捨てよとは、父御ばかりの子かいなう、母がためにも子ぢや物を、問談合に及びもせず、軍内を檢使に遣ると、一徹短慮な此文體、見るも恨めし忌ま〳〵し」と、ずん〳〵に引裂き〳〵、口に含んで嚙みしだき、夫を恨み子を歎ち、わつと叫び入り給ふ、母の慈悲心肝に銘じ、六根五臓を搾り出す、涙もあつき恩愛の、親子の歎ぞ道理なる。横須賀軍内憚なくつゝ通り、「親旦那の御狀御覽の上は、申すに及ばぬ某は檢使の役、ナウ源太殿腹召され」と、苦り切つて言放せば、「オ、覺悟は豫て極めし」と、身づくろひする所を、母は立寄り取つて伏せ、「ャァどこへ、腹とはそりや成らぬ。恥

かいた人でなし、大小捩いで阿呆拂ひ、手溫い爺御の指圖より、きびしい母が仕置を見しよ。誰そ中間共が古布子持つてこい、早う〳〵」と呼ぶ聲に、あつと答へて平次景高、古縕袍提げ出で、「申し母人、此布子どうなさるゝ」「どうするとは知れた事、こいつめに著せかへて、門前からぼつ拂へ」「それこそ望む所よ」と、無法の主從立ちかゝり、手々に捩ぎ取る太刀烏帽子、敲き落されおつぽろ髪、素袍袴の帶紐も、引きしやなぐるやら引切るやら、上著中著の綾錦、古わんばうに著せ換へさせ、腰に食ひ入る繩帶しめ付け、「おれをさつきに投げをつた、禮は平次がお脛で言ふ」と、緣より下へ踏落し、「さつても氣味の好いざまの」と、一度にどつと打笑ふ。源太は變りし我姿の、恥も無念も忍び泣、母は我子を助けん爲、人前作る澁面顏、怒る擬勢も苦口も、詞と心は裏表、「命代りの勘當ぢやと、思うて勘忍してくれ」と、言ひたさつらさ泣きたるを、胸に包めど包まれぬ、悲しい色目覺られじと、「皆の者があのざま見て、をかしがるので母もをかしい、あんまり笑うて涙が出るハ、、、、」と高笑ひ、泣くよりも猶哀なり。千鳥はかくと聞くよりも、在るにも在られず走り出で、變りし源太が憂き姿、二目とも見も分かず、「お胴慾な母御樣、勝つも負けるも軍の習ひ、誰しもかうした不覺は有る物、父御樣から殺せと有るを、お詫言は成されいで、あはう拂ひの勘當のと、是が本の父打母打、二人の親御に憎ま

れて、源太樣の御身が何處で立つ。あれ程むごう成された上は、まう勘忍して上げまして、下さりませい」とばかりにて、かつぱとふして泣き詫ぶる。「ヤァ此母が采配、小癪な、そちが何知つて、コリヤよう聞け、源太めがあのざまは、弟への見せしめ、あの恥を無念と思はゞ、西國へ攻下つて、平家を亡し手柄して、我君の御用に立たば、ナ勘當はせぬ。ナ平次、ナ心得たか、必ず手柄を待つてゐる、母が詞を忘るゝな」と、弟が事に言ひ做して、兄をはげます詞のなぞ〳〵、とくより母の御慈悲とは、知る程重き源太が額、土に摺付け泣居たる。平次景高仕たり顏、「コリヤ千鳥、なんぼ吠えても叶はぬ、是からは分別しかへ、泥坊めが事思ひ切り、おれが言ふ事聞きさへすりや、母へ願うて、コリヤ奧樣ぢや、嬉しいか」と、背中擲けば、「エ、穢らはしい、聞きともない。憎まれ子世に憚ると、何所まではどかりなされうが、厭ぢや〳〵わしやいやぢや」「ヤァしぶとい、女郎め」と、摑みかゝるを母押しのけ、「何ぢや千鳥と源太が狂うてゐる、エ、年より陳ねた徒者、こいつはおれが仕樣が有る、源太めを追ひまくれ」と、千鳥を引立て奧に入る。「コリヤ軍内、下部どもに言付け、きやつを早う捲し出せ」「イヤサお急きなさるゝな、母御の仰は兎も角も、某が存ずるは、コレかう〳〵」と、平次が耳に吹きこめば、「オ、さうぢやよい分別」と、二人白洲に飛びおり〳〵、聲をも掛けず拔打に、源太を目が

け切付くる、さ知つたりと引つぱづし、かい潜る身のひねり、軍内が諸膝かきのめらす、隙を又切りかくる、平次が刀もひらりと外し、ひつ摑んでもんどり打たせ、二人を踏付け立つたるは、心地よくこそ見えにけれ。「ヤア平次、千鳥が事を根葉に持ち、兄に敵對ふ畜生め、今踏殺すは易けれど、悪い子とても捨てられぬと、母のお詞聞捨てられず助け置く。源太に代つて孝行に仕れ」とゆん手に差上げ、くる〳〵とふり廻し、七八間打付ければ、辛き命を助かりて、跡をも見せず遁げて行く、「ヤア軍内、親共からの使なれば、俺もどうも殺されぬ、そこを源太が了簡して、殺してしまふ仕様はりう〳〵これ見をれ。うぬが刀でうぬが首、ころりと落すは自業自得果、源太は殺さぬ手ばかり動く」と言ふより早く、首と胴との生別れ、親子の別れ、今一度、母の御目にいや〳〵、仰に隨ひ平家の戰ひ、四國九國の果までも、ほつ詰め〳〵高名し、其時お顏を拜まんずと、思ひ諦め立出づる、うしろの障子さつと開く、音に驚きふり返れば、母はすつくと立ちながら、源太が方へは目もやらず、「四國九國の合戰も、素肌武者では手柄が成るまい。勘當した子に持つて行けと教へはせぬが、賴朝卿より賜はりし、産衣の甲兜、誕生日の祝儀とて、飾らせて爰に有る。我物を取つて行くに、誰が否と言はうぞ、但しはいらぬか。主もない此鎧、早取り置け妙共、女共はどこにゐる、來いよ〳〵」と呼はり〳〵入り給

ふ。「ハヽア重々深き御憐愍、忝し〳〵」と、かけ上つて甲兜を取りのくれば、思ひがけなき具足櫃より、ずつと出でたる妙千鳥、「ヤアそちは爰に何として」「サア是も母御様のお情、不義をした科で此箱に入れ糺明さす、其跡は隙を遣る、いきたい方へ連立つていきをれと、お慈悲深い御了簡」「何母人が、ハッアハヽヽ、有りがたや冥加なや、あだに思はど逆罰受けん、恐ろし〳〵。是より直に此源太が、恥辱を雪ぐ合戦の首途、お暇申し奉る」と、母の方を伏拜み〳〵、「おまめでござつて下さりませ」と、いふも盡きせぬ別れの涙、絞りかねたる袖の海、深き御恩を被りしは、身一つならぬ友千鳥、なく〳〵出でしが又立どまり、振返りては親と子の、果しなごりの憂き別れ、うき世にうき身かこつらん。

第三　道行君が後紐

捨つる身を、捨てぬほだしは子ゆゑの闇、空もあやなき曉の、髪も貌も宵の儘、世の憂辛さ悲しさを、言はぬ色なる山吹御前、月さへ西に落人の、桂の里の難儀より、知るべの方に一夜二夜、明し暮せど忍ぶ身は、都ぢかくも物うしと、けふ思ひ立つ俄旅、人目を恥づる取りなりは、身に巾もなき麻衣の、木曾路をさして行く道の、歩みぐるしく眞砂路を、よむばかりなる桂川、

お筆が背におゝさむこさむ、猿のべゝ借つて著しよ、借つて召したる若君の、危き所を遁れしも、まさるめでたき御運の強さ、亡き我がつまの種よ形見よ萱草、燒野の雉子夜の鶴、子を悲しまぬはなき物を、まして況んや人として、親の別れをしら糸の、ちすぢを分けし父君に、似たりや似たりいたいけ盛り、あれ〳〵あれを見や、二つ連れたる雲井の雁、古郷へ歸る我々も、君の古郷へ歸れども、鴛鴦の片羽のとぼ〳〵と、子に迷ひ行く小夜千鳥、つまも迷はん三つ瀬川、四つ塚東寺九重の、都の中はおのづから、傾く笠の打しをれ、今落人の身の上も、人に知られし白川の、水も淀みてあはだ山、あはれ父なき稚子を、すかせば肩にすや〳〵と、轉寐入りの餘念なき。爰こそうばが懷と、所の名さへ有る物を、お乳も添乳もな泣きそ泣きそ、晝寐の夢は變らねど、かはる姿のァ、恥かしや、轉寐がちなる我々に、色も有るかと袖袂、引き靡かせし日の岡の、戀の峠も越えわびて、呵いやといふのはナ浮世の習ひよさいな、底の心はホンニえ知らいでさいな、それがじよいなまじよいな。遙かに歌ふ聲々は、松を調ぶる春風か、それか有らぬか反響して、やう〳〵跡をおいの身の、道におくれて鎌田隼人、娘が肩背休めんと、抱き取りたる駒若丸、「音せでお寢れよい殿、ねん〳〵ねんねこせい、いとしい殿よ花やろ、花遣ろ〳〵」「花一時と眺めても、君の命にくらべては、盛久しく若君も、父御の武勇を

受けつぎて、生先榮えましませ」と、諸羽の宮に人々は、暫く法施奉り、今迎り行く道芝も、先つ比木曾殿の、鞭打ち給ふ所ぞと、聞けば草木も外ならず、浮世なりけり世なりけり。きのふめでたき人だにも、けふは漂ふうたかたの、あはづが原の討死を、思ひやるさへ悲しやな、矢一つ來つてわが夫の、内兜に射付けしは、天の咎か武運の盡きか、つひに其手で馬上より、をちこちの土と成り給ふ、所はあれよあの雲の、下こそ君の最期場と、見るに付け語るに付け、袖は涙の春雨に、しをれ侘びつゝ山吹も、心地すぐれず見え給へば、立寄り勇め慰めて、いざさせ給へと御手を引く。見渡せば、春の日あしも走井や、ならはぬ旅に身も疲れ、世のうき事をゆふ嵐、さら〳〵さつと吹きくれば、褄も裔もひら〳〵〳〵、ひら〳〵〳〵と吹き分くる、追分過ぎて大津の宿、今宵は爰にかり枕、袖を片敷く旅宿り、つかれを晴らさせ給ひける。東路を上り下りの旅人も、二つと三つに追分や、大津に並ぶ旅籠屋の、棟門多き其中に、名高き關の清水屋が、とくより奥に客泊めて、料理拵へまな板の、音もてき〳〵亭主が氣配り、下女も男もそれ〴〵に、茶運ぶ風呂燒く人泊める、門賑はしきたそがれ時、「あらたふと、導き給へ觀世音」運ぶ歩みの順禮姿、背に國名をおひずるの、年は六十に色黑き、達者作りの老人が、娘と孫を打連れて、胸に掛けたるふだらくや、紀の路大和路打過ぎて、けふも暮れぬる鐘の聲、

三井寺に礼納め、爰かそこかとさし覗けば、亭主がかけ出て「コレ親仁様、お泊りなら脇ひら見まい、名代の清水屋、桟敷が綺麗な木賃が安い、サァお這入り」と引き留むれば、「これ〳〵滅多に引つぱつて、著物破つて貰ふまい。なんぼ泊めたがりやつても、木賃を聞かにやほか〳〵と這入らぬ親仁、サァいくらぢや、きり〳〵言うた」「ハイ定りは三十なれど、よい様にして泊めましよはい」「イヤよい様とはよい衆の事、おらはずんと貧乏な西國、道々も杓振つて、順禮に御報謝で、貰ひ溜の米も有れど、たつた今跡の石場で、蕎麥をしたゝか仕てやつたりや、腹袋に足が入つて、あすまで煮焚も何にもいらぬが、ナント二十宛で泊めぬかい」「ハァそりや安けれど、順禮衆の事ぢや物、儘よ負けましよ」「イヤ安うは無いぞや、錢の高いが合點か、しかけて遣へば五分四五厘利が有り過ぎよ。サァそんならおよし草鞋解け、サァ坊上ろ、ヤァえい〳〵」と、襖隔てゝ次の間に、打寛いで、「扨歩いたは、けふは大道そちも草臥、おりや尙の事道下手で氣ばかりいらくら、船頭と鼈は陸で埒の明かぬ物、やれしんどや腰痛や、ドレ其枕取つてたも。ァヽやい〳〵コリヤ槌松よ、其襖開けん物ぢや、こはいぞ〳〵。コリヤ爰へ來い、ぢぢかんでやろ、ェヽ穢い鼻垂では有るぞ。オヽあれ〳〵、又飯行李引出すはい、さりとは徒手の無いやつ。ャほんに夫で思ひ出した、コレ〳〵宿の衆、どれぞちよつと賴んましよ、早う

早う」「オ、これとつ樣、氣立たましい何ぞいの」「イヤ此飯ごりがさくゝと洗うて貰うて、あすの出立の殘りを詰める、菜は茄子に大根を取交ぜ香物のこけら鮓、賴んで置こ」と詔はぬ、たつみあがりと頓狂聲、夫と言はねど紛れなき、舟乘とこそ知られたり。同じ浮世に憂き思ひ、人忍ぶ身はおのづから、茅にも心おく座敷、山吹御前は先達て、爰にやどりを假初も、ならはぬ旅に勞れ果て、御心地例ならねば、お傍離れぬ鎌田隼人、娘のお筆諸共に、勞はり介抱する中に、何の頑是もなき出す、駒若君のやんちや聲、襖一重に聞くも氣の毒、「アレおよし、あちらの旅人も子が有るさうなが、さつてもせがむは、わやくいふな、アレ騙してもすかしても、お怒りをると何處にも迷惑。ハア、なんぞ遣りたい物ぢやが、オ、夫よ、童すかしはこんな時、今跡で買うた大津繪、一枚やろ」と取出すを、槌松が摑んで放さばこそ、「厭ぢやくゝ」と泣きわめく。「オ、こりやくゝ破るなやい、エ、吝い坊主め、コリヤよう合點せい、此繪は座頭の坊が褌を、犬がくはへて引く所、こりや目が無うて面白ない、よその子に遣つてのけ、我にやこれくゝ衣著た、鬼の念佛嚙みくだく、撞木を持つて叩鉦、くわんくゝくゝ、イヤくわんくわんくわん」と紛す中に、およしが襖押開けて、「コレ申しお隣の、お少いのがきつい泣きやう、是進ぜましよ」と指出せば、お筆が取つて押戴き、「是はくゝ忝い、お前にも子達が有る

に、よい物進ぜて下さんした。これ〳〵あつか、ホ、好いのぢや、アレ餘所のやゝ御覽じませ、大人しい事はいの」「ォ、あのおつしやる事は、ようおとなしかろぞ、其わんぱくさ意地わるで、どうもかうも成るこつちやござりませぬ。お前のは色白に、美しい好いお子やの、お幾つでござります」「サアこのお子は三つなれど、年弱でござんすはい」「扨も、いや〳〵、そんなりや是と同い年、同じ三つと云ひながら、此坊主は二月生れで年強」「ホンニそれでか大柄にも有り、逞しい子でお仕合、見れば順禮さしやんすさうなが、奇特な事や、所はどこぞい」「アイ所は是から大方十二三里も下」「コリヤおよし、主の臍探る樣に、ぐづ〳〵した物の言ひやう、たつた一口、つい津の國の船頭ぢやというたがよいはい」「エヽ忙しない、ちつと人にも物言はせたがよいはいの。アヽ聞いて下さりませ、此樣に乳呑子を抱へ長旅を致しまするも、私が稚馴染、此子が爺は隨分達者な人で有つたが、ふと風の心地と病み付いたが定業やら、間も無く死なれて、今年がちやうど三年に當りますれど、何を供養施しも、内證の櫂は廻らず、西國は結構な事ぢやと聞けば、せめて足手を引いてなりと、夫の菩提を弔ひたさに、思ひ立つての順禮」と、語るを聞いて山吹御前、「あの子も三つ我子も三つ、爺親に別れたとは、果報拙なやいとしやなう、自とても殿御に離れ、便なき身の旅の空、世には似た事も有る物」と、身につ

まさるょ御涙。「アレ聞いたかおよし、あなたも御亭樣が無いといやい、そりや悲しいは尤ぢやが、生身は死身、合せ物は放れ物、何ほ泣いても返らぬ事、さつぱりと諦めて、早う男を持たしやりませ。ハテさう無けりや我も人も、肝心の商賣が成りませぬ、夫でこつちも近い比、幸な者聟に取つたが、此およしが枕の取樣がよい故か、何時とも無う飄柱立て、乘りまする押しまする、舟一卷ならござれ〳〵。そこでおらは一助り、大船に乘つた心、外に望は何にもないが、たつた一色、サアいづくの浦でもない物は金と化物、有る物は質の札と借錢、こいつも根繼でござります。見りやお前方はよい衆さうなが、何處元から何方へござる」と、問はれてお筆が取繕ひ、「サア我々は都を離れ、片山里から信濃路へ心ざし」「エ、聞えた、善光寺參りぢやな」「ヲ、いかにもそれ〳〵、夫に付いて難儀な事は、是にござるお主樣が俄の御病氣、お道理でも有ろ、ついに是まで道一里とお拾ひなされた事なければ、お癪の出るも尤、わしらが足さへ草鞋に食れて」塊「ホ、豆が出來たでござりましよ」奪「そりや針で突かしやりませ、惣體豆といふ物は、突くとじく〳〵汁が出まする」「アヽこれとつ樣、ひよかすかと出放題な、何ぞいの」「イヤひよかすかぢやない、好うなる事をいうて進ぜる」「アレまだいの、オヽ笑止な人や」と袖覆へば、鏃「イヤ〳〵ちつとも苦しうない、最前から手前も出て、挨拶するも合點な

れど、却て興も醒めうかと、わざと控へて居ました。今娘がいふ如く、御主人の御病氣、親子の者が御介抱も、旅宿なれば萬事心に任せず、何がなお慰と思へども、口重たき我々では埒明かぬ。正眞の旅は道連、かう打寄るも他生の緣、サア〳〵遠慮なしに何なりとも、お氣の霽るゝ咄しを賴む」「ア、旦那殿こりや迷惑、おらは咄は何にも知らぬに、オ、有るぞ〳〵、たつた一つ咄しましよ。昔々爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯しに」鐘「ア、これ〳〵、そりやあんまり、子供も知つた昔咄し、古い〳〵」釜「サア古いによつて洗濯しまする、洗うても磨いても、新しうならぬ物は、寄る年と此顏の眞黑なは悉皆牛、もう寐たとよござりましよ」と、蒲團てんでに寐轉びて、咄し半へ亭主がによつこり、「ハア、こりや皆まだお休みなさらぬか、さらば行燈を取りましよかい、此儘置けば油代が十文出まする」釜「オ、そりや合點ぢや、やつぱり置いたり。爰で一つ談合が有る、兩方兼ねた此行燈、其方も此方も勘定づく、何と三文、まけて貰ほかい」「ヘエ扨も細い虱の皮」「イヤおらが虱より、此蒲團はどやらうぢ〳〵、千手觀音は居らぬかや」「ハテ勿體ない、順禮が觀音嫌うてよい物か、信有りや德有る奇特には、道中怪我の無い樣に、乘り移つてござりましよ」と、笑うて勝手に入りにけり。跡は互に旅草臥、子供の添乳肘枕、咄のあとも轉寐に、とろ〳〵寐入る折こそ有れ、村中をかけ廻る、歩行がによつと門口から、「御亭

主内にか」「オット何ぢや」「イヤ何ぢやは、お尋者厳しい御詮議、委しい事は來て聽かしやれ、サア〳〵今ぢや、ちやつと〳〵」「ホイ、そりや行かざ成るまい、遲くば庄屋のたくら者、又頭から嚙むぢや有ろ」と、氣もわくせきだ片々に、羽織引つかけ出でて行く。既に其夜も更渡り、遠寺の鐘も幽なる、灯火細く影さして、四方に人音しづまりぬ。旅ぞとも、知らぬ稚子隣同士、宵寐惑ひの目をぱつちり、乳房離れてそろ〳〵と、這出て一人にた〳〵笑、つむりてん〳〵てうち〳〵あわゝ、間の襖を越え行けば、此方の子も出て這廻り、諾きあうて寄りこぞり、おせおせ小法師が同い年、互に愛するごとくにて、機嫌笑顔のしほの目細目、煙管ぐわたた〳〵手ずさびや、菅笠取つて著たは松茸、欲しがる顔で、握めば遣らじと引つぱり合ひ、餘念他愛も無かりしが、悅ぶ先にほつと欠伸も子供の常、又行燈に手を掛けて、こなたが引けばあなたも引き、突き戻せば押しかへし、引きあふ拍子に土器ゆり込み、灯火ぱつたり眞暗闇、我と我手に驚きて、わつと泣出す子供の聲、寐耳に惚り目覺す人々、「こりや何事」とうろ付く中、亭主が注進先に立ち、梶原が家來番場忠太、大勢引連れかけ來り、「それ遁すな」と下知すれば、捕つた〳〵と亂れ入る、音に驚く家内の騷動、震ひわなゝきあつたふた、危さこはさも暗紛れ、行き當るやら轉けるやら、上を下へと立ち騷ぐ、風も烈しき夜半の空、星さへ雲に覆はれて、

道もあやなく物凄き、裏は田畑を隔ての大藪、押分け掻き分け、忠義一途にかひ〴〵しく、お筆は片手に若君抱き、山吹御前の御手を引き、駈出でて息をつぎ、「扨もひやいや危い事、とゝ樣は多勢をふせいで跡から追付く、早う逃げよと有りし故、めつたむしやうに走つても、暗さはくらし勝手は知らず、どつちへ逃げてよからう」と、うろつく向ふへ數多の人聲、又むら〳〵とかけ來り、遁さぬやらぬと無二無三、打つてかゝれば叶はじと、山吹御前に若君渡し、一腰抜いてはつし〳〵、てう〳〵翼の早業早足、飛び違へ切り開き、弓手になぐり馬手に受け、痺まず去らず戰へば、さしもの大勢堪りかね、逃げるを遣らじと追うて行く。跡にはあ〳〵山吹御前、「長追仕やんな戻つてたも、此隼人はどう仕やつた、ァ、氣遣ひや危なや」と、あせる向ふへ打合ひ切合ひ切り結び、追ッつ捲ッつかけ來る、番場を相手に鎌田隼人、忠義に冴えたる切先刃先、受けつ流しつ上段下段、祕術を盡し戰ひしが、忠太が苛つて打つ刀、受けはづして弓手の肩先、袈裟にすつぱと切り下げられ、心は鬼神とはやれども、腕も弱る目も眩み、足を立てかねたぢ〳〵、よろ〳〵とよろめく所を、付け入り付け込み覺みかけ、とどめの刀一ゑぐり、はつと驚く山吹御前、逃がしも立てず向ふへ突つ立ち、「サァ女、其悴渡せ〳〵」「ヤァ何者なれば此狼藉、樣子が聞きたい合點がいかぬ」「ォ、樣子はそつちに覺有る筈、朝敵謀叛

の義仲が悴、敵の末は根を斷つて葉を枯す」「ハア是非もなや、此子一人助けたとて、さまで仇にも害にも成るまじ。生きとし生ける物ごとに、物の哀は知る物ぞ、取りわけ武士は情を知る。自はともかくも、此子が命を助けたい、慈悲ぢや功德ぢや後生ぢや」と、涙と俱に佗び給ふ。「ヤア甘ちこい、成らぬ〳〵、當歳子でも男の餓鬼、生け置いては後日の仇、繰言いはずとサア渡せ」と、飛びかゝつて引取れば、わつと泣く子を放さじと、取著き給ふを捩ぎはなし、突飛ばせば又縋り付き、撥ねのくれば武者ぶり付き、「やらぬ〳〵」と泣き給ふ。「ヤア面倒な女め」と、鬧擱んで投付くれば、うんとばかりに息絶えぐ、其隙に若君を宙に提げ、首はつしと打落し、小脇にかい込み、飛ぶが如くにかけり行く。山吹御前は夢心地、むつくと起きて「ハア悲しや、西も東も辨へぬ、此子に科はなき物を、むごやつらや胴慾や、還せ戻せ」の聲も遙にお筆が聞付け、息を切つて立歸り、はつと驚き抱きかゝへ。「コレお心は慥なか。若君樣はどこにござる、樣子をおつしやれ、サアどうぢや〳〵」と急き切つて、問へば答へもくるしげに、「ホ、お筆か遲かつた、情なやたつた今、追手の者が爰へ來て、隼人も討たれ駒若も殺された。ソレ首切つて逃げたはいの」エ、と仰天狂氣の如く、軈れて詞も出でばこそ、胸も張裂く悲しさの、涙はら〳〵立つたり居たり、身をもがき齒を嚙みしめ、「エ、口惜しや、今一足早くばな

あ、女でこそ有れ闇々と討たしはせまいに、シテ其切つた奴は何方へ逃げた、顔見知つてござりますか。ア、此暗さでは其も知れまい、名はお聞きなされぬか」「イヤ〳〵顔も名も知らねど、梶原が所爲で有らう、かはいやわつとたつた一聲、泣いたが此世の暇乞、父御といひ子といひ、刃にかゝりはかなき最期、剩さへ、是まで付添ひ忠義を盡す隼人まで、爰で死ねとの約束か、此はそもいかなる前生の、報いか罪か淺ましや」と、御身も絶ゆる叫び泣、お筆も在るにあられぬ思ひ、「父の最期はお主へ忠義、悔む心はなけれども、おいとしさ駒若樣、けふの今まで愛らしう私を廻し、片時離さず抱かれて、泣いつ笑うついたいけな、お顔をやつぱり見る樣な」と、くどき立て〳〵、聲も惜まず歎きしが、涙の中に心付き、せめて一目若君の、お死骸なりとも見ん物と、あたり見廻し、尋ぬる心も空も闇、怪しや血に染む稚きからだ、手に障るをかき抱き、涙と俱に撫廻々々、「ハア、此の著物はどうやら手障も違ふ、そして何やらびら〳〵と、こんな物は召さぬ筈、合點がいかぬ」とよく〳〵透かし見、「ヤア是は違うた。申し〳〵、こりや若君ではござんせぬ」「ヤア何といやる、駒若では無いとは」「ハテ此死骸は笈摺かけて居るはいな」「どれ〳〵、ほんに變つたこりやどうぢや、是は〳〵」と二度悔り、「ム、扨は今の騷動に、相宿の子と駒若と、取り違へたかハア悲しや」「ア、これ〳〵、そりや何おつしやる、

悲しい事はござんせぬ、コレ取違へたのでな、若君のお命に氣遣ない、是卽ち天の惠、御運の強さ、アツァ嬉しや〳〵有りがたや。コレお悅びなされませ、コレ申し〳〵、是はしたり、なぜ物をおつしやらぬ、ハァヽ又肱暈が來たさうな、これは〳〵ェヽお氣の弱い、不甲斐ない事では有るぞ。これ〳〵申し」と、いへども弱る身の上に、悲しさつらさ氣を揉み上げ、又嬉しさにがつくりと、引取る息も敢へなき最期、お筆はあわて、うろ〳〵きよろ〳〵、「こりや何とせうどうせう」と、脈取つて見つ耳に口、「これ〳〵申し、山吹樣いなう」といふ聲さへ、「人を憚り、思ひ切つて呼ばれぬか、ェヽ情ない、ェヽ鈍な」と、心は千々に碎けども、早色變り、手足は氷と冷え切つて、押動せど其甲斐も、涙先立つ魂も、俱に消入る憂き思ひ、大地にかつぱと伏し轉び、聲の限を泣き盡す、理とこそ聞えけれ。やゝ有つて顏を上げ、「ハァ、さうぢやさうぢや、返らぬ事悔むまじ、歎くまじ、一先此場を立退きて、妹千鳥と心を合せ、お主の仇父の敵、逃隱るゝとも天地の間、命限り根限り、やはか助けて置くべきか」と、かけ出でしが、「イヤ〳〵〳〵、其れより大事の〳〵若君、片時も早く取返さう、ァヽいや待てしばし、死骸を此の儘捨て置かれず、無緣の此子、父の體諸共に、隱さんとは思へども、前後に滿ちたる多勢の追手、隙どらば却て妨せめてお主の面影を、先々かしこへ葬らんと、あたりに茂る竹切つて、

舁き上げ乘する笹の葉は、亡き魂送る輿車、長柄も細き千尋の竹、肩に打掛け曳く足も、しどろもどろに定めなき、淵瀬と變る世の憂きを、身一つに降る涙の雨の、小止みもやらで道のべの、草葉も浸す袖袂、泣く〳〵辿り　三重行く空の。難波潟、蘆火焚く家の片庇、家居には似ぬ里の名や、福島の地はおしなべて、世をうみ渡る舟長の、有るが中にも權四郎とて、年も六つを十返りの、松右衞門といふ通り名は、養聟に讓りやる、門に日當の松一木、所に蔓る親仁有り。志す日に、あたり近所の婆噂達、お茶參れとて招かれて、「ナウ權四郎樣、けふ志の日ぢやお茶呑めと、およし樣の直にお使から伴ひ忝い、誘ひ合せて參つた」と、どや〳〵内に入りければ、「ようこそ〳〵、けふは娘が前の連合、此槌松めが本のとゝが三年の祥月命日に當つた故、澁い茶を焚きました、呑んでゆつくりして下され。常なら箸でもとらせます筈なれど、知つての通り足弱な娘や孫を引連れて順禮の長道中、物入の跡何にも仕ませぬ、とはいへ娘何ぞ無いか」「何ぞと申したら、人手は無し此子はせがむ、ほんの心ばかりをば上つて御回向頼みます」と、穀交りの煎豆に、端香持たせて汲出せば、「もう三年に成りますか、ア、月日に關守据ゑざればぢやの。今の松右衞門殿は、ござつて間もなくしみ〴〵と付合はねば、心入は知らぬが。死なしやつた此槌松の爺御は、ちやうど此人參の太爽の樣に、毒に成らぬ人で有つた

に、いとしや〳〵。南無阿彌陀。皆回向してお茶參りませ、海鹿のおあへ此の蒲公英、扨もうまし」と舌鼓、茶請に咄し嚙交ぜて、あだ口々のやかましさ、皆船頭の女房とて、乘合舟の如くなり。「ヤアよい序ぢや權四郎樣、御尋ね申す事が有る。別の事でもない、此惡さ殿、連れて順禮なさるゝまでは色黑に肥えふとつて、年より丈も大柄に、病氣なうて、ほんの赤松走らかした樣に、門を家と遊びやるを見ては、あやかり者ぢやと羨んだ子が、何として又此樣に色白に瘦せこけて、思ひ成しか、顏のすまひも變つて、背も低うよわ〳〵と、外へとては一寸出ず、あれが順禮の奇特か觀音樣の御利生かと、打寄つては是沙汰、めんよな事や」と尋ぬれば、「されば其事、ありや前の槌松ぢやござらぬ、違うた〳〵、違うた譯思ひ出すもなう恐ろしや、聞いて下され、娘よ、何日の夜やらで有つたな」「ハテ廿八日の」「オ、それ〳〵、又跡の月の廿八日、三井寺の札を納めて、大津の八丁に泊る夜、何かは知らず御上意ぢや、捕つた〳〵と大勢の侍が、コレ見さしやれ、咄するさへ身が震ひます、ほんの世話に言ふうろたへては子を倒さま、どう負うたやら娘が手を引いたやら、走つてやら飛んだやら、漸毒蛇の口を遁れ、逃げて行く先は又狼谷、谷の水音松吹く風も、跡から追手の來る樣に思はれ、扨も命は有る物かな、眞黑の夜に四里足らずの山道を、息一つ吐かばこそ、水一口呑まばこそ、命からぐ〳〵伏見へ出

て、初めて背に負うた子の、顔見ればなむ三寶、相宿の襖ごし、宵に咄しもしたわろが、連れた子と取り違へたに極つた、大儀ながら一走行て、もと〳〵へ取り換へて來てくれと娘はせがむ、ォヽ尤、取戻して來うと思ふ程先の怖さ、いかな〳〵一足も行かれるこつちやない、今には限らぬ、取り還す折が有らう、先のわろも子を取違へ、人の子ぢやととろくへろくには仕て置かぬ筈、此子さへ大事に育てゝ置いたら、三十三所の觀世音のお力、枯れたる木に花さへ咲くぢや無いか、一先内へ戻つて、潰した肝を癒してからの上の事と、畫舟に飛乘つて戻る中、乳呑まうと泣く、持合せたを幸に、娘が乳呑ませたら、夫なりに月日も立ち、名も知らねば呼びつけた槌松々々と言や我名と心得、祖父よ〳〵と馴れなじむ痛々しさ、今ではほんの槌松めも同然に、かはゆうござる」といふ聲も、咽につまらす老心、娘も倶に涙ぐみ、「時の災難とは云ひながら、緣有ればこそ此子が手鹽にかゝり、他人がましうもする事か、嗅樣々々と此乳を、呑みもすりや呑ましもすれ、馴染めば我子も同じ事、此子憎いではゆめ聊か無けれども、けふの亡者の手前も有り、成らう事なら、手取早う、もと〳〵へ取戻したうござんす」と、語るを聞いてばゝかゝ達、「夫で疑ひ今霽れた、大願立てゝの西國廻り、現世未來の觀音樣の引合せ、あつちから槌松を連れて、やがて尋ねて見えましよぞいなう、必ずきな〳〵思はぬがよい。サ

ア皆の衆、あんまりお茶呑んで、結句おなかも畫下り、いざござれお暇」と、打連れ出づる門の口、櫂の先に笠かつ付け打擔げ、立歸る聟の松右衛門、「ホこりや皆お歸りか、けふは前の聟殿の三年忌、内に居て俱々御馳走申す筈を、遁れぬ用事で罷出で、近頃の亭主ぶり、まそつと緩りと話されいで」「まそつとの段かいの、ゆるり鑓子の底叩いて歸ります。餞茶には福が有る、呑んでお休みなされや」と、住家々々に立歸る。「ハア親父樣今歸りました。茶事の間に合はう、釜の下でも焚かうと氣が急いても、相手は急かぬ大名のゆつたり、遲なはつた嘸お草臥、女房ども大儀で有つたの」「何の大儀な事は無い、お前こそ嘸おひもじかろ。坊よ、とゝ樣お歸りなされたかと、なぜお傍へ行きやらぬ、どりや飯上げう」と立上る。「コレ〳〵女房、まだ欲しうない、望みな時に此方から言はう。扨申し親父樣、大名の中に梶原殿は、取分の念者と申すが違はない、お召によつて船頭松右衛門參上と奥へ云うて行き、やゝ暫くして御家老の彼番場忠太殿がお出でなされ、先達て指上げた逆櫓の事書、一つ〳〵尋ねる程にける程に、問ひ殺した其上で、其通り申し上ぎよ、暫く待て、よう暫で有らうぞ、なゝの三時待たせて置いて、殿が直にお逢ひなさるゝ、是へお出でなさるゝと、其重々しさ物云ひの堅くろしさ、船頭松右衛門とは儕よな、智謀軍術逞しき義經へ、此景時が能く存ぜしといふ逆櫓の大事、疎に

聞受けがたし、儕舟に逆櫓を立てゝの軍、調練したる事や有る、其れ聞かん」と問ひかけられ、此度親父様に習うて、逆櫓といふ事初て知つた此松右衞門、返答に困るまいか難儀せまいか、ほつとせしが分別致し、御意ではござれども、賣船の船頭風情、軍といふ物は夢に見た事もござらぬ、逆櫓の事は我等が家に傳へ、能く存じて罷在りまするなどと申して、間に合を云うたれば、ムゝさも有りなん、然らば汝覺え有る船頭を語らひ、今宵密に逆櫓を立てゝ舟の駈引手練して、其上に知らせよ、事成就せば、御大將の召船の船頭は汝たるべし、御褒美は此梶原が取持ち、永く船頭の司として、莫大の財寶を下さりよと有る直のお詞、其嬉しさに初めの術なさ打忘れ、あたふたと歸りがけ、日吉丸の船頭の又六、灘吉の九郎作、明神丸の富藏、こいらは梶原樣のお舟の船頭、幸三人を相手にして、日暮から逆櫓稽古に此方へ參る筈、御教へなされた手際を見せ付け、立身出世はたつた今、是と申すも御指南のお蔭忝い、坊主よ悅べ、結構なべゝ著せて、持遊びに飽せうぞ、女房ども、親父樣、悅んで下され」と、語る聟より聞く嬉しさ、「イヤサ不器用な奴は、千年萬年教へても埒や明かぬ、まんざら素人のわり樣が、入聟にわせられて、一年も立つや立たず、天下樣の弟御の召さるゝ御舟の船頭する樣に成るといふは、おれが教へたばかりぢやない、其身の器用がする事でおぢやらしますよ、めでたい〳〵。聟殿

の草臥休め、娘、十二文持つて走らぬかい」「ィャ〳〵、御酒も歸りがけに九郎作が所で下された、一生覺えぬ大名の付合、膝はめりつく氣骨は折れる、播磨灘で南風に逢うた樣なめに遭うて頭痛まじり、草臥れたといふ段ではない、暮まではまだ間も有らう、親父樣御許さりませ、とろ〳〵と一寐入。およしコレ見や、坊主めが居眠るは、幸とゝが添乳せん。ねんねんころゝ」とかき抱き、納戸の内にぞ入りにける。「娘裾に何でも置いたか、出世する大事の體、風ひかすな、祝うて舟玉樣へ燈明もとほせ、御神酒上げたい、買うてくれぬかい」「買ふまでもない、是をお供へなされませ」と、棚からおろす難波燒、「ちろりと用意が有つたな」と、老のじやれ言輕口も、神慮は重き一對の、德利に餘る親心、妻は火燧の石の火に、夫の威光輝けと、油燈も細き燈明に、心を照らす正直の、神や光りを添へぬらん。妻戀ふ鹿の果ならで、なんぎすどりの海山と、苦勞する墨憂き事を、數書くお筆が身の行方、いつまではてしなには潟、福島に來て事問へば、門の印のそんじよそこと、松を目當に尋ね寄り、「ハァ御免なりましよ、松右衞門樣は此方か、お名をしるべに遙々尋ね參つた者、お逢ひなされて下さつたら、忝うござんしよ」と、物ごしのしとやかさ、「アレとゝ樣、松右衞門殿に逢ひたいと女が來た、ろくな事では行るまい」と、跡先知らで女氣の、早悋氣する詞の端、「興がる、嗜

め、松右衞門に逢うて姊ぢやというても慥氣するか、夫程氣づかひなら、呼込んで逢はせぬ先に聞いたがよい。どなたぢや女中、何處からござつた、松右衞門内に居まする、遠慮せずと這入らしやれ」「夫はまあ〳〵、お嬉しや」と、笠解き捨てゝ内に入り、「お前が松右衞門様か、お近付でなければ、お顔見知らう様はなけれども」「なけれどもなりやなぜござつた」「サア申し何が知方に成らうやら、攝州福島松右衞門子、槌松と書いた笈摺が縁に成つて」「ヤア そんなら此方は大津の八丁で、又跡の月廿八日の夜の」「アイ、お子様を取違へた者でござんす」「道理で見た様な顔ぢやと思うた事、是は夢か現かいなう。およし悅べ、槌松を取違へた人ぢやとやい。此方からも行方尋ねて、もと〳〵へ取戻す筈なれども、何を證據に尋ねて行かう手懸りもなく、泣いてばつかり居ました。其の代りには取違へたそつちの子供衆、兎の毛で突いた程も怪我させず、蟲腹一度痛ませず、娘が乳が澤山な故、喰物はあしらひばかり、乳一度あまさせず」「オ、それ〳〵、風一度ひかさばこそ、親子が大事に懸けたに付いても、此方の息子めも嘸ぞ御厄介、御世話で有らう、よう連れてきて下さつた、忝い〳〵。わるさよ、我内を忘れたか、なぜ這入らぬ」「イヤ門にではござんせぬ」「エ、連の衆が跡から連れてお出でなさるゝか、嘸ぞ御厄介忝い〳〵。ハテ早う逢ひたいな、娘お禮を申しやいの」「ア、とゝ様せは

しない、此お禮がちやつきりちやつと、つい云うて濟む事かいな。申し此槌松はなぜ遲い、お連の衆が門違へはなされぬか、此槌松はなぜ遲い、我子は如何に」「孫はいかに」と、立ちかはり入りかはり、門を覗いつ禮云ひつ、そどろに悅ぶ親子の風情、お筆が胸に燒鐵さす、今さら何と返答も、泣くもなかれずさしうつむき、暫く詞も無かりしが、「お願ひ申さねば叶はぬ譯有つて、恥を包み面目を凌いで尋ね參りしが、さうお悅びなされては、氣が後れて物が申されぬ、マア下に居て下さんせ」と、涙ながらに押ししづめ、「改めて申すもあぢなき其夜の騷、手ばしかう迯隱れなされたお前方は順禮の功德、此方は一人は病人なり、男とては有るに甲斐なき年寄、迯げるも隱れるも心に任せず、取違へた其お子は、其夜にあへなく成り給ふ」と、聞いて惚り、「とは何故に」「とはいかに」と、餘りの事に泣かれもせず、仰天するこそ道理なれ。「人の身の、仇なりと豫ては聞けど其の夜の悲しさ、ようも今日まではながらへし、云譯ながらの物語、聞いて恨を晴れてたべ。高うはいはれぬ事ながら、連の女中と申すは私の御主人、騷に取違へしとは思ひも寄らぬ若君は尙大切と、私がかき抱き、御病人の女中は親が手を引き、一度は旅籠屋の、憂目は遁れ出でたれども、追ひかくる武士の大勢、氣は樊噲と防いでも、何をいふも老人の、云ひがひなく討死し、若君は奪取られ、氣も狂亂の樣に成つて、女

中もほつたらかし、大事の若君取返さんとかけ廻る、月無き夜半の葉隱れ、尋廻る笹垣の陰、サア此方にこそ若君は在れと、取上げて見だれば、悲しやお首がまう無かつた、よく〳〵見れば若君で無い證據は此笈摺、騷の紛れに取違へしな、扨は若君のお命に恙なかりけりと、一度は安堵せしが、代を戻さねば取返されぬ若君、もと〳〵へ取戻す種になる、人の大事の子を殺し、何を代に若君を取戻さう、悲しい事を仕やつたと、夫を苦に病み、主君の女中も其座ではかなく成り給ひ、悲しみやら苦しみやら、私一人がせたら負うた身の因果、此笈摺をしるべにて尋參りしは、お果て成されたお子の事は諦めて、此方の若君を、戻して下さるゝ樣の御願ひ、大事にかけてお世話なされたと、物語聞くに付け、面目無いやら悲しいやら、あぢきなき身の上を思ひやつてたべ、親子御樣」と、かつぱと伏して泣きければ、祖父は聲こそ立てねども、涙を老に嚙みませて、咽につまればむせ返り、身も浮くやうに泣きければ、娘は心も亂るゝばかり、空しき笈摺手に取つて、「やれ槌松よ嗅なるは、夕べの夢にまざ〳〵と、前のとゝ樣に抱かれて天王寺參り仕やると見たは、日こそ多けれ爹御の三年の祥月なり、命日のけふの日に、便聞く告でこそ有りつらん、夫とはしらぬ凡夫の淺ましさ、けふは連れてくるか、あすは戻りやるかと、待つてばつかり居た物を、大きな災難に遭うて、笈摺に書いた詮もない、是が何の

二世安樂、順禮も充にはならぬ、觀音樣も不甲斐ない、怨めしや懷しや、あはれ此事が夢で有つてくれかし」と、顏に當て抱きしめて、辟をはかりに身悶し、前後不覺に泣きゐたる。「娘吠えまい、泣けば槌松が戻るか、よまい言いや二度坊主めに逢はれるか、豫て愚癡なと祖父が叱るをどう聞いて」と、いふ詞に縋り付き、「それ〳〵、かう申す私も女子ぢやが、愚癡では濟まぬ、祖父樣のおつしやる通、いか程お歎きなされたとて、槌松樣のお歸りなされると言ふではなし、再び逢はるゝと言ふではなし、さつぱりと思し召し諦めて、此方の若君をお戻しなさつて下さつたら、ァヽ有りがたい忝いと、悅ぶ私が心が何處へいかう、槌松樣の未來の爲には、佛千體寺千軒、千部萬部の經陀羅尼、千僧萬僧の供養なされたより」「女子だまれ、何の頬の皮でがや〳〵願たゝく、恥を知れやい。我子を我が育つるには、少々の怪我させても、不調法が有つても、親だけて濟めども、人の子にはな、義理も有り情も有り、主君の若君のとお言やるからは、其れ知らぬまんざらの賤しい人でも無ささうな。此おれは親代々柁柄を取つて、其日暮しの身なれども、お天道樣が正直、大事にかけて置いたそつちの子、見せうか、いや見せまい、見やつたら目玉がでんぐりかへらうぞ。人の子を勞はるは、こつちの子を勞はつて貰ふかはり、大抵大事に懸けたと思ふかい。コリャそんなら又なぜ尋ねて來ぬと減らず口ぬか

さうが、尋ねていかうにも、何もしるべの手懸はなし、そつちには笈摺に處書が有る、けふは連れて來て取り換るか、あすは連れて來て下さるか、逢うたら何と禮言はうと、明けても暮れても待つばつかり。コレ此襖を見やれ、かはいや槌松が下向に買ふと言うたを聞き分けず、無理に買うて三井寺三界、持つて歩いて嬉しがつた鬼の念佛に餓鬼、外法殿の頭へ梯子さいて月代剃る大津繪、藤の花のお山も買ひをらず、外法殿の繪を買うたは、あの樣に髭に白髮に成るまで長生しをる瑞相、鬼の樣に達者で金持つて、世界の人を餓鬼の樣に這ひ屈ましをらう吉左右ぢや、めでたい、戻りをつて見をつたら、嘸ぞ悅ばうと張つて置いて待つたに、思へば梯子は外法天窓の下り坂、鬼の傍に這ひつくばふ餓鬼に成つて、お念佛で助かる樣に成りをつたか、思へば思ひ廻す程、身も世も有られぬ、よう大それた目に遭はせたな。ア、夫になんぢや、思ひ諦めて若君を戻して下され、町人でこそ有れ孫が敵、首にして戻さうぞ」とつッ立ち上る。筆な「う悲しや」と取付くお筆を、押退けはね退け納戸の障子、さつと明くればこはいかに、松右衞門若君を小脇にかい込み、刀ぼつ込み力士立。お筆驚き、「ヤアこな樣は、あの樋口の」「コリヤコリヤ〳〵女、ムウ聞えた、最前歸りがけ、下の樋の口でちらと見た女中よな、若君は身が手に入つて氣遣ひなし、言うてよければ身が名のる、ナ合點か、必ず樋の口を樋口などと麁相い

ふまいぞ」と、瞬で知らせば打黙き、しづまる女聽かぬ祖父、「松右衞門でかしたりな、さつきにからのもやくや、寐られはせまい聞いたで有らう、そちが爲にも子の敵、其子死人づたくに切刻んで女に渡せ」「イヤさうは致すまい」「なぜ致すまい」「サア夫は」「サア夫はとは、エエ水臭い。云はいでも知れた、儕が胤を分けぬ槌松が敵ぢやによつて致さぬな。其根性では祖父が儘にもさしやせまい、まう破れ被れぢや、おれが言ふ樣にせぬからは、親でも子でも無い、娘そこら駈廻つて、若い者大勢呼んでこい」と氣を急いたり。「ヤレ待て女房、人を集むるまでもなし。親父樣、どう有つても槌松が敵、此子を存分になさるゝか」「くどいく」「ハア是非もなし、此上は我名も語り、子細を明かして上の事」と、若君をお筆に抱かせ上座に直し、「權四郎頭が高い、天地に轟く鳴る雷の如く、お姿は見ずとも定めて音にも聞きつらん、是こそ朝日將軍義仲公の御公達駒若君、斯く申す我は樋口次郎兼光よ」と、いふに親子は新肝取られ、靭れ果てたるばかりなり。樋口お筆に打向ひ、「扨々女のかひぐしく、跡々まで御先途を見屆くる神妙さ、山吹御前も思ひ寄らぬ御最後、御身が父の隼人もあへなく討死したりとな、力落し思ひやる。夫に付けても斯くて在る、樋口が身の上嘸不審、若君の爲には祖伯父ながら、多田藏人行家といふ無道人を誅罰せよとの御意を請け、河内國へ出陣の跡、鎌倉勢を引受け粟津

の一戰、誤なき御身を闇々と、御生害遂げ給ひし我君の御最期の鬱憤、すぐにかけ入り一軍とは存ぜしかど、思へば重き主君の仇、術を以て範頼義經を討取り、亡君に手向け奉らんと、此家に入聟し、逆艪を云ひ立て早梶原に近付き、義經が乘船の船頭は松右衞門と事極る、追付け本意を遂ぐる樣に成るに付け、此若君の御在所は何處、如何ならせ給ふと心苦しき折も折、最前よりの物語、障子越に聞くに付け、見れば見る程面窶れ給へども、紛ひもなき駒若君、扨は思ひ設けず願はずして、所こそ有れ日こそ有れ、其夜一所に泊合せ、取りかへられて助かり給ふ若君は御運強く、殺されし槌松は樋口が假の子と呼ばれ、御身代に立つたるは、二心なき某が忠臣の存念、天の冥慮に相叶ひ、血を分けぬ子が子と成つて、忠義を立てし其嬉しさ、何に類の有るべきぞ。是も誰が蔭親父樣、子ならぬ我を子となされ、親ならぬ我を親とする槌松、恩も有り義理も有り、餘所外の子と取違へての敵ならば、其許に御堪忍なされうが、女房がよしと申すとも、其敵安穩に置くべきか。親父樣の御歎、我も不便さは身に迫れども、相手に取れぬ主君の若君、弓矢取る身の上には、願うても無き御身代、祖父親の名を揚げた槌松、其名を上げた元はと問へば、私を子と成されし親父樣の御厚恩、千尋の海蘇迷盧の山、夫さへ御恩には中々比べがたけれど、まだ其上に大恩有る主君の若君、孫の敵とて祖父樣に切られうか、我手にかけ

て主殺しの惡名が取られうか、花は三芳野人は武士、末世に殘る名こそ恥かしけれ、御立腹の數數御歎の段々、申上げう樣はなけれども、親と成り子と成り夫婦と成る、其緣に繫がるゝ、定り事と思召し諦めて、若君の御先途を見屆け、まだ此上に私が、武士道を立てさせて下されば、生々世世の御厚恩、聞分けてたべ親父樣」と、身を謙り詞を崇め、忠義に凝つたる樋口が風情、兼平巴が頭を踏まへ、木曾に仕へし四天王、其隨一の武士と、世に名を取りしも理なり。權四郎はたと手を打つて、「さうぢや、侍を子に持てばおれも侍、我子の主人はおれが爲にも御主人、ハヽヽサア〳〵聟殿お手上げられい、舟玉冥理、再び丸額に成つて炊食する法も有れ、恨も殘らぬ悔みもせぬ、泣きもせぬ、娘精出して早う又槌松を產んで見せをれ」「扨は御得心參りしか、ハアア忝や嬉しや」と、互の心ほどけ合ひ、千里の灘の漂舟、湊見付けし如くにて、悅び合ふこそ道理なり。お筆嬉しく若君を、樋口の次郎に手渡し、「其許にかくておはすれば、此お子に氣遣なし、浮沈は世のならひ、私が妹、此津の國に勤奉公すると聞く、夫が行方も尋ねたし、大津で討たれし親の敵、討つて亡者へ手向けたし、何やらかやら事繁き私が身の上、早御暇」と立上れば、「さう聞いて留めるも無調法、エ、殘念ながら我等の身分、力にならうとも得申さぬ、御勝手にお出でなされ」「聟殿、ハテもぎだうな、せめて二三日足休め」「夫々とゝ樣のおつし

やる通り、かう心が解け合へば、初め何のかのと申した程、結句名殘有り、平に」と留めても止まらぬ氣、涙に「くれ〳〵若君を」「頼まるゝの頼むのといふ中かいの、本意を遂げて又御出」、さらば〳〵と門送り、見送る袂見返る袖、お筆は別れ出でて行く。「扨て〳〵武家に育つた女中は格別、娘今からあれ見習へよ。こりや爰に七面倒な笈摺が有る、何所へなりとつとゝ捨てゝしまへ」「親父樣、夫は餘りな思召切、せめて佛前へ直し香花も取り、逆樣な事ながら、御回向なさつて取らさつしやれましよ」「侍の親に成つて未練なと、人が笑ひはせまいか」「何の誰が笑ひましよ」「ハア、嬉しや〳〵、有りやうはさつきにからさうしたかつた。娘納戸の持佛へ火を燈せ」と、手に取上ぐる笈摺の、「千年も生かさうと思うたに、たつた三つで南無あみだ、〳〵、槌松聖靈、頓生菩堤。聟殿ござれ。娘もこい」と見れば、見かはす顏と顏、俱に涙にくれの鐘、かう〳〵とこそ聞えけれ。早約束の黃昏時、又六を先に立て、富藏九郎作三人連、門口から用捨なく、「松右殿内にか、約束の通り參つた」と高呼はり、「オ、待つて罷居ります」と、身輕に拵へ飛んで出で、「御大儀々々々、這入つて煙草でも參らぬか」「いや〳〵大事の急ぎの御用、一精出して跡でのたばこ、しつぽりと先やりませうぞや。オ、ともかくも」と、皆川岸に下り立つて、繫げる手船の渡海作り、纜解き捨て飛乘り〳〵、「ナウ松右殿、舟で

妻子を養ひながら、恥しいがついぞ逆艪と云ふ事は」「オ、知らぬ筈〳〵、何事もおれ次第、教へてやる。サア九郎作と又六は、おも柁取柁の艫艪を立てた。富藏是へお出でなされ、おれがする様に艪を立てた。コレ皆の衆、此様に舳から艫へ向つて艪を立てる、是を逆艪といふはいなう。惣じて陸の戰は、敵も味方も馬上の働、駈けんと思へば駈け、引かんと思へば引く事も、自由げに見ゆれども、舟といふ物は又格別、知つての通り汐に連れ、風に誘はれ、艪拍子立てて押す時は、行く事も早けれど、乘戻さんと思ふ時は、おも柁とり柁の風波を考へ、取柁つかの手の中、舟をくるりと本の如く、押廻して漕戻す、夫さへさす汐引く汐にもぢかうて、舟に過有る時は、八萬奈落の憂きめを見、いとしかはい妻子に再び逢はれぬぢやないか」「如何にもさうぢや」「其の憂きめを見まい爲の此逆艪、サア其艫の艪を押した〳〵」おつと心得、「やつしつし、しゃやつしつし」三段ばかり漕出す、「サアかう舟を漕寄せて、追ッつ捲ッつ戰ふ時、謀に乘せらるゝか、敵に新手が加はるか、スハ負軍と見る時は、舟押廻すまでもなく、コレ此逆艪押立てゝ、富藏合點か」「合點ぢや〳〵、やつしつし、しゃやつしつし」元の所へ漕戻す、隙を窺ひ富藏九郎作櫂追取り、松右衞門が諸膝薙いで打倒さんと、右左よりはつしと打つ。心得たりと顯りこえ、陸へひらりと飛上れば、三人續いてかけ上り、「ヤア卑怯なり松右衞

門、儕木曾か郎等樋口次郎兼光といふ事、梶原殿よく御存知なされ、逆艪の稽古に事寄せて、搦捕り連來れと、我々に仰付けられた。尋常に腕廻すか、打ちのめして縄掛けうか、腕を廻せ」と言つたり。樋口からく〳〵と打笑ひ、推量に違はぬ上は何をか包まん、朝日將軍義仲の御内に於て、四天王の隨一と呼ばれたる、樋口の次郎兼光、儕等風情が搦め捕らんとは、まもの付けたる一番碇、蟻の引くに異ならず、成らば手柄に搦めて見よ」「ヤァ洒落くさい廣言、跡でいへ」と櫂ふり上げ、擲り立つるを事ともせず、かい潜つて引つたくり、先に進みし富藏が、頭微塵に打碎けば、「一人では叶はぬぞ、二人かゝつて手に餘らば打殺せ」と、立別れはつしと打つ。さしつたりと開く身に、櫂と櫂とは相打に、互の眉間あ痛しこ、ためらふ隙につッと入り、櫂引つたくつて捨てたりける。組んで捕らんとむり無三、取付く二人を引寄せく〳〵、力に任せえいうんと、踏み碎く天窓の皿、微塵に碎け死してけり。「サァ安からぬ若君の一大事何とせん、我身をいかに」とためらふ胸に、ひつしと響く鉦太鼓、數百人のをめく聲、こはいかにく〳〵と驚く中に心付き、「究竟の物見櫓ござんなれ」と、かけ上る門の松、顔にべつたり蜘の巣や、松葉の針であいたしと、目ざすばかりは暗からぬ、繁る梢の朧月、四方をきつと見渡せば、北は海老江長柄の地、東は川崎天滿村、南は津村三つの濱、西は源氏の陣所々々、人ならぬ所もな

く、天を焦せる篝の光、「扨は樋口を洩すまじ、取逃さじとの手配よな、さも有れいかに」と飛んでおり、「女房ども、親父樣々々々」と呼立つる。「ィエとゞ樣は納戸の壁を毀つて、何方へやら行かしやんした」「ヤァ壁こぼつて失せたとは、ムウ讀めた、訴人にうせたな。財寶を貪つて訴人する、豫ての氣質では無けれども、槌松が仇を忘れかね、それで失せたか。ハァ樋口程の武士が、舟玉の誓言に氣を奪はれ心を赦し、飼犬に手を喰はれた、エ、口惜しや無念や」と、拳を握り齒を鳴らし、萎れぬ眼に泣く涙、磨き立てたる鏡の面、水を注ぐが如くなり。「お腹立は理ながら、とゞ樣に限つて、よもやさうでは有るまい」と、云ひ宥むる折こそ有れ、組の捕手の腰明り、武威輝す高挑燈、畠山の庄司重忠、權四郎に案内させて見えければ、娘は夫と見、「コレとゞ樣恨めしい」と、言はせもあへず、「訴人の恨か言ふな〳〵、おれが訴人せいでも、松右衞門を樋口次郎とは、梶原殿が能く御存知なされて、富藏や九郎作に、搦捕らさうとなされたぢやないか。夫ばかりぢやない、四方八方取り圍んで、樋口が命は籠の鳥、何ぼ助けうと思うても助からぬ、おれが秩父樣へ訴人したは槌松めが事で」「サァ其槌松の事をいうて松右衞門殿が腹立てゞ」「何の腹立てる事が有る、親子といふ名に繋がれて、孫めが親と一所に、彼方者に成りをらうかと悲しさに、あれは樋口が子ではござりませぬ、死んだ前の入聟の、

ナ松右衛門が子で、ナ合點がいたか。ほんの親子でござらぬからは、訴人致した代り孫めが命、お助けなされ下されと願うたれば、段々聞し召し分けられ、天下晴れて孫めが命は、オヽ慮外ながら此祖父が助けた。夫に何ぢや樋口が腹立てた、ヤイ儕が子でもない、主人でもない、若君でもない、大事の〳〵おれが孫を、一所に殺して侍が立つか、若い其の大きな眼にも、祖父が碎く心の數々は見えまいぞ、恨めしいと吐かす儕等が、けつく祖父は恨めしい」と、氣を急上げて曇り聲、よう訴人なされた、有りがたしとも過分とも、云はぬ詞はいふ百倍、嬉し涙にくれけるが、すつと立つて重忠の傍近く、「天晴御邊が梶原ならば、太刀の日釘の續かん程、切死に死なんずれども、粟津の軍、妹巴が身の上まで、志有りしと聞く重忠殿、情に刃向ふ刃は無し、腹十文字に搔き切つて、首を御邊に參らす」と、言はせも果てず、「ヤア樋口、死首を取つて手柄にする重忠ならず、とても叶はぬと覺悟あらば尋常に繩掛られよ」「いや〳〵〳〵、運盡きて腹切るは勇士のならひ、繩かゝれとは此樋口に、生恥かゝせん結構な、仁義有る重忠の詞とも覺えず」「イヤこれ樋口、木曾殿の御内に四天王の隨一と呼ばれ、亡君の讐を報はん爲、權四郎が聟と成つて、弓矢に勝る艪櫂を取つて、大將の舟を覆し、鑿にせんず謀、恐しゝ賴もしゝ。晉の豫讓は主の智伯が仇を報ぜんと、御邊が如く姿を變し、敵襄子を狙ふ其志

を深く感じ、著たる所の衣服を脱いで豫讓に與へ、其衣を切らせて彼が忠義を立てさせしは、敵ながらも襲子が情、木曾殿叛逆ならざる事は書置に顯はれ、御最期今更悔むに甲斐なし。主人に科なき樋口次郎、全く恥を與ふるにあらず、忠義武勇を惜み給ふ、大將義經の心を察し、重忠が縄かくる」と、つッと寄つて樋口が肘、捻ぢわぐればにつこと笑ひ、「關八州に隱れなき勇力の重忠殿、力盡には劣らぬ樋口、取られし此腕もぎ放すは易けれど、智仁兼備の力には、及びもない事相手に成られず、ともかくも計らはられよ」と、弓手の腕を押廻せば、「ヤァ愚々、忠義厚き樋口殿の力に重忠が及ばんや、大手の大將範頼公、搦手の大將義經公、兩大將の御仁政、文武二つの力を以て警むる此縄ぞ」と、掛くるもかゝるも勇者と勇者、仁義に搦む高手小手、縄付を引立てさせ、「コリヤ女、樋口殿の血こそ分けね、槌松とやらんは大切な子でないか、暇乞を」と有りければ、およしは泣く〳〵納戸に臥したる子を抱上げ、「コレなう暫し假初も、親子と云ひし此世の別れ、コレ顔見せて」と指寄れば、「ハ一ツァ槌松に暇乞とは、四相を悟る重忠の御情、ぢいの願を聞分け給ひ、助けおかるゝ忝なさ、誰彼の情も忘れぬ。コレ槌松、とゝと云はずに暇乞」「樋口々々、樋口さらば」と稚子の、誰れ教へねど呼子鳥、我は名殘もをし鳥の、番離るゝ憂き思ひ、遣らん〳〵と縋り付く。「娘よ吠えな、何ぼやらん〳〵と商賣の舟歌で

留めても留らぬ、ァヽ悲しや、たとへ死んでも地獄へはやらん、極樂へ遣る弘誓の舟歌、思ひ切つてやつてのけう。唄　汐の滿干に此子が出來たとな、孫が身の上案じるな、ぢいが預りのんえいく、われが代に大事に育ててえいよほん、ほゝんほ。ほんに何たる因果ぞ」と、正體も無くどうど伏し、涙に咽ぶ腰折松、餘所の千年は知らねども、我身につらき有爲無常、老は留まり若きは行く、世は倒の逆艪の松と、朽ちぬ其名を福島に、技葉を今に殘しける。

第四

山遠うして雲旅人の跡を埋む。爰も名に負ふ香島の里、西國の往還とて、曉が家居も賑へり。「今日は天道大日如來、未申の年は御一代の守本尊」と、錫杖ふり立て、家々に立つ辻法印、「謹上さんぐ再拜さいへいと敬つて白す、伊勢に神明天照皇太神宮と申奉るは、御本地は大日如來、御眞言にはおんあびりたていぜいから、斯の如く唱へ奉れば」「ォヽ手の隙がない、通らしやれ、山伏の内へ齋料乞ふは山伏の友喰」と、いひ〳〵女房表に出て、「コレ嗜ましやれ此方の人」「是は扨うかく來たればつい内ぢや、機緣直しに錫杖をふり立てく、「今日の天道大日樣も聞えませぬ、餘まりけふは設が無さに、願は未申の年、一代守るは大きな嘘、分

限菩薩とくだい勢至の金持ばかりを守つて、我等が内には不動様の火炎の様な火が降り、福一まんとは名ばかり、下用櫃には虚空藏菩薩、米が無いとせがまれ、天窓の皿は八幡寶藏、割鍋にとぢ蓋のめをとが口を過ぎかね、何とせん手觀世音、文珠菩薩の智慧借つて、ちつと小錢を設けねば、中々身代たよりん〳〵、たどいをなすなよこちの嶽、敬つて白す」としやべりける。「コレ法印殿、けふは設が有つたやら、仇口を利かしやるの、草臥休めに出端なとこまさう」と、茶釜の下へ挿しくべる、其日の煙もかつ〴〵の、暮しを祈る術もなし。世に憂き事の多き中、お筆は若君駒若殿を、一樋口次郎が手に渡し、妹千鳥に廻り逢ひ、親の敵をねらはんと、上福島より彼方此方と尋侘び、香島の里に著きにけり。「妹が身の上聞く爲には、幸の山伏殿、ちと御免成りませ」と内に入り、「私は旅の者、筮がお頼み申したい」「ォゝ能うこそ」と、女房仕事押しやり、「薄くと一ぷくきこしめせ」と、詞の潮に指出せば、しかつべらしく法印、「愚僧が筮は祕傳の投算、或は失物走人、夢合せ夢判じ、相場の高下相性墨色、薪のさつしよ釜の鳴、犬の長鳴、鷄の宵鳴烏の行水、親父の夜あるき息子の看經するまでも奇妙な見通し、錢次第」とぞ勸めける。「アィ私はたつた一人の兄弟を尋ぬる者、つい廻り逢ふ手がかりを占うて下さりませ」「フゥ夫はよつ程むづかしいが、端的に占ひませう」と、風呂敷より算木取出

し、「コレ信を取りませうぞ、ついべり賭する樣に投げた分ではいかぬぞや」「成程々々、おまへの樣な見通しに、お目に懸るは仕合」と、算木投ぐれば、「オ、よし〳〵。ナニ年はいくつぢや」「アイ十七八でもござりませうか」「成程十七八と見える、こなたの弟樣ぢやの」「いえ〳〵妹」「ム、成程算木の面に女と見える、何年程逢はしやれぬ」「五六年も逢ひませぬ」「成程五六年も逢はぬと見える、こなたの尋ぬる心當は何處ぢや」「アイ人の噂には神崎に勤奉公」「オオ勤とも〳〵、コレ見やしやれ、占の面には籠の中の鳥の如しと有れば、廓の外へ一足にても、踏みもならはぬと古い書物に記した上は、勤の身は籠の中の鳥、妹樣は神崎に、傾城奉公に疑ひない、何ときつい見通しか」「イエそりや私が口うつしをおつしやるばかり、廓の中でも何處らに居ようと、方角さして下さりませ」「ハテ滅相な、夫が見える程ならば山伏はしませぬ、相場事にかゝるはいの。ナア嘸さうぢやないか、此在外れを眞直に行けば神崎、逗留して尋ねさつしやれ」「ハア夫なれば是非もない」儀に包錢、詈のふしに陰陽師と、辻風防ぐ笠傾け。お筆はかしこへ急ぎ行く。「ヤ女房ども、此お客は何處へぢや」「イヤどつちへとの先も云はず、今朝からお留守」「コリヤ惡い病が付いたはい、錢なしの手てんがうぢやの」「ハテ麁相いはしやんな、神崎のお傾城梅が枝樣は得意旦那、其よしみで誰有らう、梶原樣の御惣領源太樣を預り、

米薪味噌鹽まで、梅が枝樣から仕送り、お歷々のあなたがそんな事何のいの」「イヤさうでない、贅はしたしちやんは無し、惡氣の付くまい物でもない」と、噂半へ立歸る、梶原源太景季、勘當の身の寄所、辻法印にかくまはれ、見る影もなき素紙子一纏、門口から笠取つて、「やれ〳〵方々かけあるき、存じの外草臥れた。法印嘸待つたで有らう」「何の待ちましよ、急な事で金がいる、才覺賴むと、人にばかり世話やかせ、何處に這入つてござりました」「されば〳〵、其才覺に身もあるいた、急な用が出來てきて、梅が枝に逢はねばならぬ、と云うてから紙子の風體、此形ではどうも行かれぬ」「アノ此比まで召しましたお小袖や羽織はへ」「女房いふな、夫は此法印が賴まれて、七難卽滅と曲げて仕廻つた、おろせ遣手に紙花の借錢濟し成れたはい、お前も言はれぬ贅張らずと、傾城買には紙子がじやうせき」「イヤさうでない、今まで大夫が情にて、見苦しい尾も見せず、此形では行かれぬ、明日へとも延ばされぬ其譯を聞いてたも。義經公には一の谷の平家を攻めんと、明日未明に御陣立、源太も此度高名せでは、父に再び對面ならず、發足と定めしが、彼產衣の鎧兜梅が枝に預置き、夫が欲しさに右の譯、したが思案も有れば有る物、けさより尼が崎大物の浦をかけ廻り、大將義經公、一の谷へ御出陣、京都より來る兵糧米、馬の飼料遲なはれば、米麥大豆の差別なく、今日中に香島の里、辻法印

が方へ持参せよ、則武藏坊辨慶殿御判居わりし證文を引きかへ、軍終らば一倍增で御返濟と、百姓どもを騙せしが、辨慶樣のお目にかゝり、其上で御用に立つと、追付け爰へ皆來をる、爰が氣の毒、何とぞ急に辨慶を拵へずば成るまい、指詰め賴むは頭役、法印辨慶に成つてたも」「ハレやくたいもない、辨慶は兵、愚僧はよわ者、七尺ゆたかの大の法師と、五尺に足らぬちつくり法印、似ても似付ぬお赦しなされ」「イヤこれ、足を爪立つれば、四寸や五寸は瞞めらるゝ、其上をまだ繼足して、高足駄で背はくろめる、辨慶が身の所作は、仁王の形でして居りやよい。あれ〳〵向ふへ百姓ども、隙取つては氣の毒」と、いやがる法印無理やりに、連れて一間へ入りにける。百姓どもはどや〳〵と、叺藥莽引つかたげ、「何と太郎兵、彼お山ぶは是かいの」「オヽ聞及ぶ辻法印、爰ぢや〳〵」と内に入り、「お方樣、是の内に辨慶樣がござるげな、大物の百姓共、お馬の飼料持つて來たと、御家來衆にいうて下され」「成程々々、辨慶樣もお待ちかね、どりや其通り申上げん」と立つて行く。景季は法印を辨慶に拵へ立て、一問を立出で、「ヤア百姓共、約束違へず大儀々々。先程も云ひ聞かす通り、源氏の大將判官殿の、御用に立つは汝等が身の大慶、軍終らば一倍增しにて返さるゝ、御判頂戴するは有りがたいか」「ハア有りがたうはござれども、只證文より手形より、辨慶樣にお目見え致し、お直の詞下さるゝが、御判よ

りも慥な」「そりや百姓等が願ひに任せ、只今是へ」と反古張の、明り障子さつと開き、立出づる辻法印、往生ずくめの辨慶出立、肩から裾まで束髮斗の一枚肩、白上に紺染の大夜著、女房がいつちよら帶、引きしごいて蜻蛉結び、痩せたる頬に鍋炭塗り、處まだらの武藏坊、長刀がはりの金剛杖、竹簀子を踏み轟かす木履の繼足、凄じう見られんと、踏んばたかつたる其有樣、さらに強うは見えざりける。源太は態と兩手をつき、「大物の百姓共お目見え」と披露して、「こりや〳〵汝等、只今下にお居りなさる、其處らあたりへ地響せう、心得て驚くな」ハアハアはつと恐れ敬ひ、ためつすがめつ、見られて術なき辻法印、見せ物に出た心地なり。百姓共口々に、「何と聞及うだより手先なども青白け、ひがいすな生れ付、お背はきよいと高けれど、からだに似合はぬおつむりが小い、振賣の飯蛸で、天窓に實のない辨慶樣、あれでも兵樣かいの」と、目引き袖引きつぶやけば、「扨は旦那のお顏の寢れで、誠の辨慶樣でないと思ふか、都から段々打續く戰場のお勞、殊に此間はお風を召しておしつらひ、氣むづかしさに態と物もおつしやれぬ。ァヽ、御病氣でなくば、旦那の力が見せたいな。アレ見よ、あの右の肘に百人力、左の肘に百人力、夫程力持つ者が、辨慶樣で有るまいか、あはれやれ米一粒借すまいというて見よ、お腹が立つと惣身の力がぶつ〳〵と涌出し、千人でも萬人でも、風に木の葉鬼に

煎餅、めり〳〵ひしやり粉微塵」と、強い揃へを言ひ立つれば、山伏も頭に乘つて、強う見せんと拳を握り肘を張り、力めば額に黑汗流れ、腕白な手習子が、畫上り見る如くなり。百姓共は頭を下げ、「其樣にお強い事を聞く上は、なう皆の衆、何と思はしやる」「ハテ辨慶樣に極つた、とてもの事の念晴しに、今のを問うて見さつしやれ」「オヽ夫々、私共が在所の物知り咄に、辨慶樣は書寫にござつて、御紋は輪棒と聞きましたが、見れば御紋は束髮斗、どうした事」と問ひかけられ、源太もほうと行詰り、「イヤ何、物ぢやはい、僅な兵粮米をそち遠に無心おつしやる風體、世に連れてりんぼうの御紋も、びんばふに變つた」と、眞顏になつて取りかくれば、「ア、お笑止や、何ぼ力が強うても、錢銀には楯づかれぬ、內證聞いておいとしい」と、藥畚叺米俵、めん〳〵に持つて出で、「おらは白米一斗五升、大豆八升」麥稗小豆、濡手で粟の摑み取り、源太は硯引寄せ、手取早く證文認め、書判しつかとする。の世に至りても、大物の浦に留まりし、武藏坊辨慶が、借證文とは是とかや。源太は名宛に引合せ、一札渡せば受取つて、「畢竟是には及ばねども、面々の念の爲、軍終らば一倍增を、お忘れなされて下さるな、お暇申す」と打連れ立ち、川中で剝がれた尼が崎、大物さして立歸る。女房は走出で、「さつてもひあいな欺し樣、中程からほぐれが來て、わしやあぶ〳〵思うて居た」「一向に此の法印は、始終夢

中で遣り付けた」と、夜著を脱捨て汗押し拭ひ、「ァ、仕おほせたと思うたれば、どつかりと氣草臥」「オ、道理々々、首尾能くいたもそちが蔭、源太は此雜穀物、金の代りに向ふへ束ね、身の廻りを受戻し、片時も廓へ急ぎたし」「實に御尤さりながら、持ちもならはぬ肩仕事、凡是でも一石餘り、お一人ではいかぬ〳〵、時の用には法印も、片端を仕らん。若しも是にて不足ならば、辨慶が脱殼の、夜著も次手に曲げませう」と、藁畚叉指荷ひ、一足いては肩をかへ、二足いては息をつぎ、香島の里に馬は有れど、君を思へば徒歩はだし、人は戀ともしらげのよねに、憂身を窶すぞ世なりけり。爰も名高き難波津に、戀の舟著數々の、多かる中に取分けて、酒汲みかはす神崎の、里の色宿千年屋は、客に絶間もなかりける。殊に今宵は晴のお客と、書院座敷のはき掃除、亭主が袴、中居が揃への紅も、園生に植ゑて隱れなき、大名客御入と、表の方賑はしく、人目を忍ぶ旅乘物、御供廻りもかる〴〵と、地に鼻付けて主が答拜、御出を待つやこがれしと、追蹤輕薄切辭の、切戸口より直に昇込む奥座敷、梅が枝樣へ人走らせ、ソレお菓子たばこ盆、釜を沸らす音羽山、馳走ぶりとぞ見えにける。雪や霙や花ちる嵐、かはい男に偽なくば、本の心で淡路島、千鳥も今は此里へ、身をば賣られてやり梅の、名も梅が枝の突出には、名木並ぶ方もなく、ちとせが許に入來り、亭主立出で、「ェ、遲い〳〵梅が枝樣、

けふのお客は東國のさるお大名、初對面から身請の相談、箱入の駿河小判、づッしりとしたお捌、サア〳〵奥へ」と云ひければ、「東國とおしやんす其客の年ばい、廿ばかりでつくりと、色の黑い髭男かえ」「氣もない事〳〵」「夫で心が落付いた、わたしも爰に待合せ、逢はねばならぬ人が有る」「おつと合點、そこは我等が請込み、禿衆で座敷をくろめん、お前の御用は彼深間の源太樣に」あひの襖を引立てゝこそ入りにける。「此姉樣はなぜ遲い、杉を迎にやつたるに、早う來はなされいで、心急かれやァ、しんき」と、待つに程なく姉お筆、千鳥に逢ふが嬉しさに、足もいそ〳〵遣手が案内、梅が枝見るより、「なう待ちかねた姉樣、さつきに道で逢ひし時、言ひたい事の數々も、人目を遠慮」「ォ、そりや姉も同じ事、何からかゝら言はうやら、よう健で居てたもつた」「お前も御無事で嬉しい。久々便りも聞きませぬが、爺樣もおまめに在ろ、やつぱり桂の里にお住みなされてござるかえ、御持病は發らぬか」と、問ひかけられてお筆は涙、「まだとゝ樣の事知らずか」「知らぬかとは氣遣ひ、どうぞいな」「アノとゝ樣はお果てなされたはいなう」「エ、」はつとばかりに梅が枝は、しばし涙に暮れけるが、「ァ、思へばわしは不孝者、とゝ樣は息才な、健でござると思ふから、我身の戀に跡先忘れ、末に面倒見屆けうと、約束せしお人が不慮に勘當受け給ふ、男の爲に此勤、身の徒に

親の事、思はなんだ罰があたつて、命日忌日がいつぢややら、知らずに暮した不孝の罪、姉様こらへて、とゝ様のお位牌へ、詫言をして下さんせ」と、はつと叫べば、「オ、悔は道理、其上にまた悲しきは、お煩ひでも有る事か、刃にかゝり果て給ふ、其様子は自らが木曾殿に宮仕へ、假初ならぬ御主人の御臺若君諸共、父の方に圍まひしが、桂の里にも居る事叶はず、都を出でて大津の泊、追手の者が寐込へ切り込み、暗がり紛れうろたへて、相宿の順禮の子と若君を取違へた、其麁相が御運の強さ、先の子は殺され若君は恙なく、慥な人に渡せしが、悲しいは母御様、其場でお果て、隼人様も敢なき最期、親の敵が討ちたさに、そなたの行力しるべの人に、聞いて尋ねし此神崎、廻り逢うたは兄弟の縁の深さ、女でこそ有らうずども、兄弟が心を合せ本望遂げう、姉が力に成つてたも、頼むは妹ばかりぞ」と、語るも聞くも涙なる。「なう姉様、悲しい中にも敵を討つが梅が枝がとゝ様への言譯、其ママ敵は誰でござんすえ」「アア聲が高い、壁に耳、諸萬人の入込む色里、敵に洩れては一大事」と、咄しの半へ亭主かけ出で、「サア梅が枝早う〳〵、お前の背丈金積んで身請の相談、座敷は金で買い、そこを不勤になさるゝはどうした心底、ぜひにお供」と手を取れば、「アヽまう其處へ行くと云ふに、聞分けない。コレ姉様、今は何も咄されぬ、後に必ず來て下さんせ」「成程々々、今咄した事、是非に

今宵は延されず、其用意して待つて居や」後に〳〵と約束固め、お筆は旅宿へ立歸る。「サア太夫樣のお出の樣子、お座敷へ注進」と、きほひかゝつて走り行く。「シャほんに何ぢやの、此梅が枝が心も知らず、身請々々と取持顔、厭らしい。夫はさうと源太樣、暮方からお越しなされと、香島まで文やつたに、なぜ遲い事ぢやまで、早う逢ひたや顔見たや」逢へばどうしてかうしてと、たばこ引寄せ薫らする、胸の思ひは日に千度、夜ごと〳〵に通ひくる、梶原源太景季、心を盡せし身の廻り、大盡小袖長羽織、炮烙頭巾紫の、色に引かるゝ揚屋町、千年が奥を窺へば、「おれを待つのか疊算、ちやうど好い首尾幸」と、ずつと通れば梅が枝は、巨燵にとんと身を背け、煙比べ　ん淺間山と、そらさぬ顔で吹く煙管。「コレ歌どころぢやない來たはいの、何が機嫌に入らぬやら、めつきりと持たせぶり、大名客の襟に付き、御勿體でえすか、我等が樣な浪人の、黴びた衿には好かれまい」と、ずんど立つを、「待たしやんせ、座敷ばかりを勤める筈で、けふ爰へ貰はれたは、文で知らせて合點ぢやないかえ。色も戀も打ち越して、心底盡の二人が中、口舌どころぢやござんすまい。お前と一體かう成つたは、並大抵の事かいな。わしもいふ事たんと有る」と、袖から袖へ手を入れて、しつと引寄せ引きしめて、「遲う來ながら其いぶり、憎い男」と目に脆き、涙ぞ戀の習はしなり。「まうよい、泣きやんな疑晴れた。扨そ

なたに云ふ事有り、今夜七つの出汐に父を初め、弟の平次景高、一の谷へ出陣、某も好い時節、軍勢に紛れ下るに付き、そなたに預けた産衣の鎧、請取りに來たはいの」と、聞くにはつと當惑の、色目見て取る景季、「いや〳〵氣づかひ仕やるな、長う別れる事でもなし、ぜひ今度は行かねばならず、お事も豫て知る通り、もと某は頼朝卿の烏帽子子、夫を功に勘當の詫せぬかと、父の思はく世の人口、此度平家と戰はど、分捕高名譽を顯はし、今の難儀を昔語、悦んでたも梅が枝」と、何心なく語るにぞ、思ひ設けし事ながら、俄にはつと胸痛み、「其鎧の事聞くと心の苦しみ」「シテ其鎧が何とした」「わたしが方には疾うから無い」「ヤア〳〵〳〵」と源太も聞くより狂氣の如く、身を揉みあせり、「樣子が有らう、子細を語れ」と氣をいらてば、「ソレ其樣に浮世の事に疎いのが大名の懷子、浪人の中苦勞させまいと、此の神崎へ身を賣り、突出しの其日より、お前を客の名宛にして、皆わたしが身揚、たとへ世に在る人でも、里の金には詰るも厭ひ、まして勤の身なれば、金の生る木は有るまいし、生える土は持つまいし、お主の勘當赦りるまでと、いつもの揚屋に呑込ませ、積り〳〵し揚代三百兩の金の代りに、其鎧は遣つたはいな」「扨は其金が無ければ、鎧は源太が手に入らぬか、ハア」はつとばかりに當惑し、暫し詞も無かりしが、「元此鎧は頼朝卿に拜領、家にも身にも換へざるを、仕爲したり殘念

や、今は悔みて返らず」と、胸押寛げ刀を取れば、梅が枝あわて押し止め、「こりやまあどう狼狽へてぢや、死ないでも大事ない」「イヤ〳〵今夜の出陣を外れ、一生埋木と成り、のたれ死せんより、只今切腹、そこ放せ」「サア〳〵其鎧さへ手に入れば、お前の望は叶うでないか。ンテ其金はどうして調へると御不審も立たう、そこがお前と談合づく、奥の客に身を任せ騙らしなば、二百兩や三百兩の金は自由」「扨はおれ故身を汚すか」「夫の難儀にや換へられぬ」「不便の者の心やな、たとへ死んでも忘れぬ」と、涙ぐめば、「ア、女房に何の禮、お前が爰にござつては、客をたらすに心が措かれる」「オ、尤々、後に來うぞや首尾よう仕や、が氣を揉んで持病の痞、借錢の代りに癪おこらしてたもんな」と、別れてこそは歸りけれ。跡見送りて梅が枝は、暫し涙にくれけるが、「必ず氣遣なさるよな、エ、わたしが心當の有るというたは皆嘘、お前の命が助けたいばつかりぢやはいな。何の好もない奥の客が、三百兩の金くれうぞ。今宵中に調へねば鎧も戻らず、源太樣の望も叶はず、金ならたつた三百兩で、かはい男を殺すか、ア、金が欲しいなア」唄二八十六で文付けられて、二九の十八でつい其心、四五の二十なら一期に一度、わしや帶解かぬ。「エ、なんぢやの、人の心もしらず、面白さうに唄ひくつさる。あの歌を聞くに付けても、源太樣に馴染め館を立退き、君傾城に成りさがつても、一度客に帶とかず、一日

なりと夫婦に成らうと、思ひ思はれた女房をふり捨て、此度の軍に譽を取り、勘當が赦されたいと思召す、男の心はぶんな物ぢや。何かに付けて女程、思ひ切りのない物はない、男故なら勤するも厭はねど、またどの樣な悲しいめを見ようも知れぬ、夫も金故、何をいうても三百兩の金が欲しい」唄わしや帶解かぬ、二十なら四五の、四五の二十なら一期に一度、わしや帶とかぬ。かへらぬ昔戀ひ忍ぶ。「ほんに夫よ、あの客殺して身請の金盜まう、ィヤ〳〵〳〵、若し仕損じ殺されては、とゞ樣の敵も討たれず、ァヽどうせうな、最早日本國に梅が技が祈る神も佛も無いか、ハァ、オヽ夫よ、夫故には石と成つたる女も有り、我は賤しき流の身なれど、一念は誰に劣らん」巖となれる手水鉢、水結び上げ口すゞぎ、伏拜み〳〵、人に知らせじ聞かせじと、柄杓追取り、「傳へ聞く無間の鐘を撞けば、有得自在心の儘、是より小夜の中山へ、遙の道は隔れど、思ひ詰めたる我念力、此手水鉢を鐘となぞらへ、石にもせよ金にもせよ、心ざす所は無間の鐘、此世は蛭に責められ、未來永々無間墮獄の業を受くとも、だんない〳〵大事ない。海川に廢れる金、一つ處へ寄せ給へ、無間の鐘」と觀念す、面色忽ち紅梅の花はちりぢり心も髮も逆立ち上り、柄杓持つ手も身も震はれ、既に打たんとふり上ぐる、二階の障子の内よりも、「其金爰に」と三百兩、ばら〳〵と投出す、深山おろしに山吹の、花吹きちらす如

くにて、爰に三兩かしこに五兩、「是は夢か現かや、何方か知らぬが此御恩、死んでも忘れぬ忘れぬ」と、嬉しいやら怖いやら、拾ひ集むる心もそゞろ、袖引ちぎり三百兩、包むに餘る悅び涙、鎧代りの此金と、押戴き〳〵、勇み勇んで走り行く。梶原源太景季、首尾か不首尾の二筋を、只一筋に揚屋町、奥はさわぎの最中、禿がな出でよかしと、奥の吉左右聞くまでは、暫し待つ間も千年屋の、首尾を窺ふ姉お筆、今宵の中兄弟一所に敵討たんと思ひ込み、小褄りゝしく鉢卷しめ、梅が枝に逢ふまでと、飛石傳ひ細路次の、間の切戸に身を潛め、今や出づると待居たる。走り躓き梅が枝は、產衣の鎧を持たせ、息を切つてかけ戻り、かしこにどつかと鎧櫃、下せばとつかは立歸る、景季見るより飛立つばかり「ヤレ出かしたいかい働、源太が武運に盡きざるも、弓矢神の御加護」と押戴き、「出陣の刻限、七つには間も有るまじ、是より直に出陣、めでたう歸り對面せう、無事で勤めや、さらばや」と、立つを引き止め、「奥の客の情にて金を調へ、鎧を取ると暇乞もそこ〳〵、せめて暫しが中なりと、わしにたんのうさせたがよい。殊に又お前の耳へ入れねばならぬ事が有る、マア下に居て聞いて下んせ。けふ久しぶりで姉樣にお目にかゝり、話を聞けばとゝ樣は大津にて、切られてお果てなされたといな、其敵討相談に姉樣も見える筈」と、聞いて源太もはつと驚き、「シテ〳〵其敵の名は何と〳〵」「オ、其敵

の假名實名、妾が言うて聞かさう」と、めつきり切戸引つぱづし、つッと入る姉お筆、「なうよい所へ姉様、幸あなたとお近付」「妹默りや、近付にならいでも、名はよう聞いたそなたの夫、サァ〳〵梅が枝、源太殿に隙取つた」「エヽ」「えゝとはどうぢや、親隼人殿を討つたる敵の子には添はれまい」「そんなりやとゝ様討つたのは」「ハテ知れた事梶原平三」「アノ景時様かえ。ハァ」はつとばかりに詞も無し。「其又父景時殿を親の敵といふ、慥な證跡言へ聞かう」「オヽ有るとも〳〵、木曾殿の御臺若君御供申し、大津の宿にて梶原が討たせしは、兄弟の者が父鏃田隼人清次殿、イヤ驚くまい源太殿、知らぬ顔はしら〳〵しい、後暗いさもしい。サァ〳〵妹縁切つた」と、いへど答もないじやくり、「扨は互の戀にからまれ、親を夫に見かへるのか」「イエさうではなけれども、因果な縁を結び初め、今さら何と成る物」と、かつぱと伏して泣きゐたる。景季もつッ立ち上り、「父を敵と狙ふ汝等、其方から望まいでも、此方から隙くれた、出くはしたを幸、此場で返り討にすべきを、見遁すは今までの誼、女の業には討たれぬ敵と觀念し、尼法師にも櫛をかへ、親隼人が跡弔へ」と、詞尖に云放せば、お筆はくわつと急き上げ、「身不肖なれども鎌田が娘、腰拔と思うてか、但女童の刀で景時は切れまいがの。サァ切れぬか切れるか、鹽梅見せう源太殿、イヤ相手にならぬはおくれたか」と、詰寄り〳〵打ち鳴らす鍔音、七つ

の鐘の胸さきに、響き渡れば南無三寶、早出陣の刻限と、鎧提げ立上るを、「どこへ〳〵、我々が付け狙ふを、此方に知られた上からは、輙うは討たれまじ。景時の代に不足なれども、親子は一體敵の片破、一寸も動さぬ」と、詰寄れば梅が枝も、一人は姉一人は夫、あなたこなたを思ひやり、うろ〳〵と立つたる所に、いづくよりともしら羽の矢、狙の壺はお筆が胸板、はつしと中ればかつぱと伏す。「なう悲しや」と、あわて立寄る梅が枝が、腰の番を二の矢に射られ、はつとばかり驚きながら、兄弟互に顔見合せ、「姉樣に過ないか」「そなたに怪我無かつたか」是はと驚き取上げ見れば、矢の根も無き二本の箭、何者の所爲ぞと、奥を見入つて立つたる所に、「其射人爰に」と、一間の障子さつと開き、滋籐の弓携へ、しづ〳〵と立出づるは、梶原平三景時が妻の延壽、源太見るより、「ヤア母人、面目もなき御對面」と、疊にひれ伏し蹲る。母は我子に目もかけず、しとやかに座に著き、「珍らしい千鳥、以前は自が召使の妙、今は名も變つて梅が枝といふ流の身、そなたには此母が、段々禮を言はねばならず、そも鎌倉を立退いてより傾城に身を沈め、源太を育む志を聞くより、嫁に勤はさせられず、はる〴〵と難波に上り、そなたを身請せん爲、此揚屋へ來て樣子を聞けば、折しも源太は勘當の詫の綱にもと、一の谷へ出陣、思ひも寄らず產衣の鎧を揚錢の代に取られ、既に我子も腹を切るべき難儀と成るを身に

引受け、世の雑談に云ひふらせし、無間の鐘を撞いてなりとも、源太が望を叶へたいと、我身を捨てゝ勞る心底、母は障子のあちらにて、殘からず聞いて居たはいの。我子に心を盡す梅が枝、何と無間に沈められう、蛭の地獄へ落されう、最前金を三百兩遣つたるも此延壽、尉當の子に貢ぐ金、母が面は合されず、顏も名も包みしが、心は殘らず打明す」と、語りもあへず泣き居たる。「扨は奥のお客といふも、奥樣お前で有つたか」と、驚く妹を突退け、お筆は傍へつゝと寄り、「夫程恩有る梅が枝に、何で矢を射さしやつた。察する所こなた衆親子が云合せ、返り討にする所存で、射止めたと思はしやろが、箭ばかりで射られしは、兄弟が運の强さ、コレ天道樣が明なによつて、非道の劒は身に立たぬ、何と非道で有るまいか」「イヤ非道にもせよ、道にもせよ、現在夫の景時殿を、付狙ふ二人をば、卽座に射留しは自が手柄、夫への忠節、武士の妻に成つた役、鏃を拔いて箭ばかり射かけしは、梅が枝への恩がへし、延壽が心底見られよ」と、胸押しくつろげ二本の鏃、突立てんとする所を、源太かけ寄り、「何故の御自害」と、御手に縋り押し止む。「何故とはそちが可愛さ、景時殿が大切さ、なうお筆兄弟の衆、妾が夫子を思ふに付け、親を討たれ無念に有らう、口惜しからう、親のかはりに景季を討たうとは尤、さりながら、鎌田殿を討つたるは、意趣切闇打の業でもなく、木曾の落人山吹親子を連れて退いたは、鎌田

にもせよ、誰にもせよ、見付次第に討取つたるは、鎌倉殿への忠節、番場忠太が手にかけしは、景時殿へ又忠節、草葉の蔭の隼人殿、よも恨とも思すまじ。爰をよう聞分け、延壽が自害で敵討を濟め、一刻も早う源太を出陣さして下され。今度の軍に手柄をして、宇治川の恥辱を雪がねば、最早一生景季は、勘當の身で朽果つる、夫が可愛い不便にござる、武士の夫に連添へば、義によつて命を捨つる、夫はまだも惜しからう、子故には此體、一分だめしにためされても、命はちつとも惜しうない、サア留めずとも死なしてくれ」と、氣を揉み身を揉み聲を上げ、「子は箇程にも思ふまい」と、かつぱと伏して泣居たる。景季は一心不亂、母の慈悲心肝に沁み、我故御心を苦しむる、不孝の罪は子に報い、此身は武運に盡き果てん」と、悔むを聞いて梅が枝、「わたしが心も推量して下さりませ、敵を討たでは不孝と成り、討てば夫婦の緣切るゝ、所詮此身を姉と夫へ引分け、死なうと思ひ定めし」と、歎けばお筆も涙ぐみ、「今のお詞を聞くにつけ、父の古主は鎌倉殿、夫に背く木曾殿の御臺若君、わらはが緣にて圍まひ、夫故に討たれ給ふは古主の罰、不忠させしも自故、殊に番場が所爲と有れば、親子御共に敵でない、道を立て誠を盡す延壽樣に、過させてよい物か。此上の願ひには、今までの通り此妹、御不便賴む源太樣」「オ、聞分けてさへ下さるれば、梅が枝は嫁、嬉しやく、是で夫も安穩、源太が望も叶ふとい

ふは、一筋ならず二筋の此箭、夫を狙ふ兄弟を、此矢で射とめ命を助け、夫婦中よう添遂げて、梶原の家を再び興す此矢なれば、疎かには成りがたし。先祖鎌倉の權五郎景政より、家の紋は三つ大の字に定まれども、今よりは二筋の此箭、梶原が家の定紋、譽を世上に顯はせ」と、義ゃ立て通す詞の張弓、梶原が矢筈の紋、此時よりと知られけり。源太は悅び、「早お暇給はらん」と、つッ立ち上れば、「オヽ夫々、片時も早う出陣の、用意々々」と、皆立寄つて鎧櫃、武運も開くる產衣の、鎧直垂小手脚當、上帶引きしめ梅が枝が、結ぶ妹背の忍びの緒、兜打物夫夫に、箙かき負ひ出立ちたる、骨柄ゆゝしく見えにける。名殘惜しげに梅が枝も、「延壽樣のお詞で、夫婦のかためはたつた今、假へ此身は別るゝとも、我名は夫の影身に添ひ、出陣の御供」と、筒に生けたる紅梅を、一枝手折り箙に挿せば、元來若武者に、相合ふ若木の梅が枝が、互に無事でと目で知らせ、領く度に散る梅の、匂ひは袖に殘りける。「遒武者ぶり類なや」と、母は悅び兩手を上げ、「今度の軍に、花も源太も我先がけん〳〵と勝色見せて、父の鬱氣を赦されい。冥加盡きなば討死せよ、生きて歸るは不孝ぞ」と、涙ながら敎訓の、慈愛の詞忝く「我も平家と戰はんに、花箙こそ好き敵と、多勢が中に取込めなば、太刀眞向にかざしの花のゝちりちりばつと追ひちらし、向ふ者を拜打、又廻りあはゞ車切、蛛手加久繩十文字、鶴翼飛行の祕

術を盡し、譽を取り、其時母のお笑ひ顔、見せうぞいさおれ早お暇」と、勇み勇んでたつか弓、矢筈の紋と景季が、文武は古今に芳ばしく、花有り實有る武士と、語り傳へて其名をば、箙の梅と末の代に、譽を永く留めけり。

第五

源平互に攻戰ふ、生田の大手を打破らんと、梶原平三景時、次男平次景高、無二無三に切つて入り、敵あまた切散らし、太刀の火めきを冷さんと、攻口少し引退き、一息ついで立つたる所に、後陣の方より番場の忠太、逸散にかけ來り、「搦手の大將義經、平家の本陣須磨の城を攻めんと有つて、鐵拐が嶺、鵯越、一の谷の逆落し、手ばしかき謀、知らせ申す」と言はせも果てず、父景時、「ホ、よく知らせたり、軍に素敏き義經に、高名させては一分立たず。今一度敵陣へ切つて入り、此大手を打破り、義經に鼻開かせん、氣を弛ますな者共やつ」と、下知の半へ梶原が、物見のさいさく敵陣より駈戻り、「只今平家の城中を窺ふ所に、梶原遣らぬ遁さぬと戰の眞最中、御父子の外に梶原と名乘る者の候ふや、不審なり」と注進す。平次景高眉を顰め、「敵にもせよ味方にもせよ、梶原が名字を名乘るは、我々親子の外には無い筈、鬼神も恐るゝ梶原の

苗字を盗み、敵を威さん爲なるべし。何にもせよ憎い仕方、景高實否を糺さん」と、駈け行くを誓しと止め、「梶原と名乗るは外ならず、兄の源太と覺ゆるなり、宇治川の恥を雪がん爲、やさしくも先駈せしな。よし誰にもせよ、其頭に乘つて此城郭を打破らん、續けや續け」と逸散に、城中さしていく田の森、梶原源太景季、平家の多勢と打合ひ戰ひ、今を盛の梅の大木、小楯に取つて控ゆれば、平家の軍兵菊池の一黨、「遁さじ、やらじ」と追取卷く。「ヤア物々しや、我には合はぬ敵なれど、菊地と聞けば名に愛でて、花に緣有る草と木の、生田の梅も簾の梅も、散りかゝつて面白や。八騎を相手に早咲の、梅も源太もさきがけに、勝色爰に未開紅、飛鳥の飛梅祕術を盡し、けふの軍の好文木」と、切つて廻れば、白梅變じて紅梅の、血汐流れて、敵も痿まぬやり梅に、甲も打落されて、大わらはの姿と成つて、引くな引かじと春風に、花を散して三重戰ひける。景季は事ともせず、百術千慮の手を碎き、袈裟切堅割腰車、切り伏せ〳〵饗、恐れて寄付く敵もなし。汀の方より四五十騎、眞砂を蹴立て駈け來る。すはや敵よと太刀取直し、近付くをよく〳〵見れば、父の平三景時なり。源太は見るより大地に伏し、恐れ入つたる風情なり。遺羨強き景時も、久しぶりの我子の顏、見る目の中に涙を浮め、「やおれ景季、汝が所存も母延壽が物語にて聞きたるが、武士の身に取つては、忠孝の二つ、何れに疎は

なけれども、最重きは君命、そこを辨へざるは武士の若氣、勘當したるも汝が心を鬪す爲の母の慈悲、合點がいたか景季、今こそ父が實の子」と、手を取つて引立て、物の具の塵打拂へば、「扨は源太が御勘當御赦免とや」「云ふにや及ぶ。汝が今日此城中に踏みとどまり、平家の多勢を切靡け、菊池が一黨討取つたるは、宇治川の先陣に勝つたる高名、此勢に乘つて、落行く平家を討ちとどめん、いざ來い源太。跡に續けや者共」と、親子主從勇みに勇み、汀をさして追うて行く。梶原が二度の駈とは、今此時と知られたる。搦手の大將軍九郎判官義經公、一の谷の大敵を、逆落しの一戰に攻破り、平家の一門或は討たれ、或は四國に落行けば、鎧の袖に勝色見せ、軍の勞を晴さんと、花に屯の名大將、下知に靡かぬ草もなし。かゝる所へ畠山次郎重忠、樋口の次郎を高手に禁め、御前間近く引居ゆれば、跡に續いて梅が枝兄弟、權四郎若君をかき抱き、「道々も申上ぐる通り、樋口殿をお助けある樣にお取なし、秩父樣のお情」と、鎧の袖に取付き縋るを目もやらず、御前に向ひ、「仰に隨ひ、樋口が罪科、法皇の叡聞に達し候へば、主の爲に讐を報ぜんと謀る忠臣の心、强ち罪科とも云ひがたし。さりながら、勇者の法に任せ、ともかうも義經が心の儘に計らふべしとの院宣故、重て召具し候」と、申上ぐれば。「さればこそ、恐れながら法皇の叡慮、我が思ふ所恰も符合を合せたる如し。今彼を罪科せば、此

後主君の爲に仇を報ぜんと思ふ忠臣の道絶え果て、弓矢の道を失ふ道理、樋口が命は助くべし。早繩とけ」と宣へば、「イヤなう義經殿、言はれぬ弓矢の道を云ひ立て、我を助け、豫て中好からぬと聞く梶原などが讒言に遭ひ、鎌倉殿と中違うて、後悔ばし給ふな、よつく分別せられよ」と、死を顧みぬ志、義經打笑はせ給ひ、「天下の政に小鮮をにるが如し、梶原づれが讒言を聞入れ、義經と中違ふ鎌倉殿ならば、夫こそ日本弓矢の破滅、助けよと言はぬばかりの法皇の院宣、殊更義仲内甲に殘されし、謀叛ならぬ最期の一通明らかなれば、汝にかゝる科はなし、彌命助くるぞ。殊に汝が子ならぬ子の槌松、十五歳に成るまで、權四郎とやらん、隨分勞り守育てよ、鎌倉表は此義經が動功に換へても、宜しく事を計らふべし」と、初め番ひし秩父の詞、未前に察する名將の、恩義に繩も打とけて、お筆兄弟樋口が悅び、權四郎有りがた涙、若君抱きいそ〳〵と、福島さして立歸る。梶原平三景時親子三人、番場忠太を引具し、後馳せにかけ付け、「扨こそ樋口が縛とかれしな、勇士は勇士の計らひにせよとの院宣、私に繩を解かれしは、鎌倉殿を踏付くる仕方、但しは我身を勇者と高ぶつての仕業か、大將顏を振舞ての所爲ならば、此景時も侍大將、なぜ談合は召されぬ。忠太寄つて樋口次郎に繩掛けよ」と、言はせも立てず義經公、大きに面色變らせ給ひ、「樋口を助け誤ならば、義經が腹切るまでのこ

と、一度ならず二度ならず、過言の振廻赦されず」と、太刀に御手をかけ給へば、景時も膝立直し、「御邊が首に景時が太刀は立たぬ物か、サア拔かれよ、相手にならん」と詰め寄れば、秩父は君を押し圍ふ、父は源太が押隔て、「秩父殿、御前のお取なし」「言ふにや及ぶ、大事を前に置きながら、爭は善惡共に皆非なり。景時を引立てられよ」「承はる」と無二無三、連れて御前を立ちにける。此體を見て平治景高、「エ、生溫い兄の采配、親父の代りに相手に成る、サア義經殿」と詰寄る所を、樋口透かさず飛びかゝり、景高が衿かい摑み、引つ擔いでどうど投付くれば、是はと立寄る番場忠太、首筋摑んで動さず、「コレ〳〵兄弟、父隼人を討つたるは此奴と聞く、親の敵今討て」と、力に任せ打付くれば、兄弟嬉しさ飛立つばかり、「親の敵覺えたか、覺えたか」と、起しも立てず寸々に、「切つたか、出かした〳〵、此奴はおれがさいなまん」と、胴骨踏へて首ふツつと捻切り、「鎌倉殿の寵臣梶原が悴を我手にかけ、生害遂ぐる上からは、我を助け賜ひし義經の御身に後難も無く、誰々に難儀もかゝらず、返す〴〵血を分けぬ悴が事、義經公重忠の御憐愍願ひ奉る」と、云ふより早く太刀取直し、我と我首えい〳〵と搔き落す、忠義の最後ぞ潔き。各〻勇士の心を感じ、諸卒を從へ御凱陣、平家の大敵悉く、八島の外へ切靡け、めでたき春に咲榮え、勝色見する箙の梅、源氏は益さかろの松、榮は千年の若緣、竹の齡

は萬々歳、神と君との道直に治る御代こそめでたけれ。

ひらがな盛衰記　終